

仲
原
正
治
のまちある記

東日本大震災・地震・津波被災地(宮城編)



仲原正治
の
まちある記

目 次

第二章 地震・津波被災地 宮城を歩く

震度7のまち 栗原市 2011年5月	3 P
仮面ライダーのまち 石巻市 2011年9月	10 P
石巻日和アートセンター 2011-2013年度	17 P
中学一年生の石巻ボランティア 2012年11月	24 P
「みんなの家」釜石・宮城野 2013年1月	33 P
女川・南三陸町にて 2015年1月、2016年1月	45 P

第二章

地震・津波被災地・宮城を歩く

震度7のまち 栗原市 2011年5月

★ 震度7 栗原市若柳の友人を訪ねて

東日本大震災で、宮城県を訪ねたのは、2011年5月のゴールデンウィークが最初だった。いわき市にある私の自宅に前日から宿泊していた横浜から来た友人達と一緒に、友人が住む宮城県栗原市を訪ね、そこから、南三陸町へと向かった。

忘れられているかもしれないが、今回の大地震の3年前、宮城県栗原市では、2008年6月14日に発生した「岩手・宮城内陸地震」で震度6強の地震を経験している。この地震は、山間部の温泉地を襲い、私の友人で、栗原市の観光産業づくりを手伝っていた観光・交流プランナーの麦屋弥生さんが「駒の湯温泉」で土石流に流されて尊い命を失っている。

自宅のいわき市から、磐越自動車道を経て東北自動車道の若柳金成インターを降りて、海岸方向に向かうと、新幹線の高架橋が連なっており、その柱が鉄板で巻かれ、耐震補強されていた。これは2008年の地震の際に補強されたものだ。この地方を襲った今回の東日本大震災の震度7の衝撃は新幹線の橋脚にもおよび、今回の地震で東北新幹線の復旧が最後となったのは、一関から仙台の区間で、橋脚の補強工事のためだった。

栗原市若柳川南地区を訪ねた。この地域は米どころで、田んぼが連なっている。近くには伊豆沼があり、雁の飛来地として有名で、ラムサール条約の湿地となっている場所だ。隣接する大崎市の蕪栗沼(かぶくりぬま)周辺地域では水鳥との共生を目指した「ふゆみずたんぼ農法」の実践を行うなど、農薬や化学肥料に頼らず、田んぼの生き物の力を活かした持続可能な米作りも盛んに行われていて、NPO法人「蕪栗ぬまっこくらぶ」が組織されている。今回はその活動を支援している私の友人で「ラムサール・ネットワーク日本」の代表者の一人で若柳地区に住む呉地正行氏を訪ねた。

若柳地区の中心部の道路を歩くとブルーシートが目立つ。友人は自嘲的に「ブルーシート通り」とか「赤紙通り」と話していたが、今回の地震は3月11日に震度7を経験し、相当の家屋が被災したが、追い討ちをかけるように4月7日に震度6強



2008年の地震の後、鉄板で耐震補強された栗原市内の新幹線の高架橋
撮影：呉地正行
2011年5月



ブルーシートの目立つ通り若柳地区のメインストリート
撮影：2011年5月2日

仲原正治

の

まちある記

戸、「要注意」が12戸、「危険」が30戸となっている。実に約75%の家屋が何らかの問題を生じてしまっている。

栗原市では、震災後、2回にわたり職員が建物の「応急危険度判定」に入ったが、行政が家屋に対して当初行なったことはこの判定と罹災証明を出すことが中心となっていた。友人によると罹災証明等の手続は、「応急危険度判定」の調査の後に「危険」家屋に対しては先行して罹災証明のために調査を行い、その時に申請用紙を配り、その場で書くように指導したということで、わざわざ役所に行く必要がなく、行政の対応が素早かったと評価をしていた。

しかし、この地区には今後大きな問題が残されている。三陸地方を中心とした津波で被災した建物の撤去については行政主導が進められており、住民は撤去の承認をすることで、費用負担することがない。しかし、若柳地区を含む栗原市では、罹災証明がある住家(居住している住宅)のみに対して、市の指定の処理場に搬入すれば解体した廃棄物の処理費用は行政が負担するというもので、住居以外の建物(蔵など)の処理費用は個人負担となると当初は広報で周知した。しかし、議員等からの指摘を受け、住居同様に廃棄物の処理費用に限り行政が負担することになった。むろん、廃棄物処理以外の解体・搬出費用等はいずれも個人負担となる。

なお、支援制度としては、半壊以上の住宅修理について、1世帯あたり52万円を限度に補修費が支給され、被災者生活再建支援制度では最大300万円が支給されることになっているが、所得制限などいくつかの要件があり、全員が満額もらえるものではない。個人財産の処分や再生について、行政の助成金はあまりあてにできないということだ。

その結果、撤去費用を用意できない人は、要注意の建物でも、そのまま使用することになるし、危険のレッテルを張られた家屋でも、何の対処もせずに住居を続け、取り壊しをせずに放置するというケースもでてくる。

友人の自宅やいくつかある蔵は、危険又は要注意のレッテルが貼られ、自費で解体することになるが、そうした場所にも、様々な業者が訪ねてくると言う。ひとつは骨董関係の業者だ。彼らは、壊れた蔵の内部を見て、あまり価値がないと言いつつもたくさんのものを安価で持ち去っていった。もう少し早く筆者が訪ねたら、そうしたことのアドバイスをしあげられたのにと少し悔しかった。また、もう一つは、蔵自体が明治期に造られ、建物の柱や梁が現在ではなかなか手に入らないものなので、建築関係の業者が譲ってほしいと来ることだ。その代りに解体は無償で行うとのことだが、立派な梁などを見ると、確かにもったいないという気持ちになる。



地震でつぶれた家屋が、数か所あった。

撮影：2011年5月2日



右：応急危険度診断で危険とされた家屋の張り紙が多い

撮影：2011年5月2日

仲原正治

の

まちある記

左：友人宅の蔵の外壁は崩れ、自費で解体撤出処理することになる
撮影：2011年5月2日

右：蔵の内部の梁は造った当時とあまり変わらないくらいきれいだった
撮影：2011年5月2日



震災時に、友人は栗原市に不在で、1週間は奥さんが一人で暮らしていたが、電気や水道がストップしていたときに、頼りになったのは地域の手助けで、近所の人たちが食べ物を分かち合ってくれたりもしていた。しかし、震災後に建物が危険ということで、町を去る人も出てくるようになると、基本的なコミュニティが崩壊することになる。

実は、こうしたケースは栗原市だけではなく、仙台市などでも、大規模な団地で盛土に建築された住宅は傾いていたし、液状化により使用できなくなった建物が多く存在する浦安市などでも同じことが発生している。個人財産への支援は原則的に行わないため、建物はなくなったがローンだけが残る人、次のローンが組めなくて、土地を去る人が増えてしまい、地域のコミュニティが少しずつ崩壊していくのだ。こうした災害での地域再生に際して、ローンなどについての優遇処置を何らか与えないと地域の再生が難しくなる。

バブル経済の破綻の際に、不動産の価値の低下に伴い、すべての銀行が倒産する危機を迎えた時があった。その時、銀行に対して数千億円規模の公的資金の導入をして助けたことがあった。公的資金とは国民の税金である。今回、銀行はその時の恩を国民に返す良い機会だと思う。少なくとも残ローンの金利をゼロにして、5年間返済を凍結するくらいのことをしていただきたいものだ。

さて、被災地の地域コミュニティは今後何回か、崩壊の危機を迎えることが予想される。まず、震災で家屋が倒壊、崩壊して住む場所がなくなり、また死亡者が多いとそれで最初のコミュニティ崩壊が起きる。次に避難所での生活で何ヶ月か暮らしていて、ようやく親しくなってきた時期に、仮設住宅に入居することになるが、これが家族別の抽選となっており、当選した人と落選した人により分けられる現象が起きる。ここで2回目のコミュニティ崩壊が起きる。そして、仮設住宅の入居基準

仲原正治

の

まちある記

である2年後には、また新天地に行かなくてはならなくなり、そこでまた親しくなった人との別れが待っている。そういう変遷が予想されるので、この間に、どのようなコミュニティを作っていくのかを、地域だけではなく行政やボランティアも考えていく必要がある。

少なくとも、個人単位の仮設住宅の抽選をやめて、部落単位などを実践するべきと思う。行政の何に対しても平等主義で臨むという態度は、こういう危機の時に果たして役割を果たせるのだろうか。避難所にいる人全員に同じものが配ることができない差し入れは拒否し、抽選で決めれば公平だとかいう論理は、住民から苦情が出たときに「いいわけ」できる理由を探しているだけにしか聞こえてならない。生まれ育った土地への愛着、周りの人々と暮らした心地よい人間関係、それらが一瞬のうちに壊され、その後の何年にもわたって、修復されないのが、大震災なのである。東日本だけではなく、いつ、これが自分のまわりで起こらないとも限らないのが今なのだ。



石巻章太郎ふるさと記念館で記念撮影。この二人はこの後結婚した。
撮影：2011年5月2日

★南三陸町に向かう

栗原市を後に登米市に向かい、途中で「石巻章太郎ふるさと記念館」で、一緒に行動を共にしている友人と記念撮影。この施設は、震災後1カ月程度で再開している。その後、重要文化財となっている「旧登米高等尋常小学校」（現教育資料館）に向かう。1888年に建てられた木造2階建ての校舎で、コの字型に教室が配置されていて、正面玄関にはバルコニーがある堂々とした和洋折衷の建物だ。この付近は6強の震度で、遠くから見るとあまり被害が感じられないが、近くで見るといたるところのガラスが割れ、ビニールで暫定補修されている。この辺りは「みやぎの明治村」と呼ばれ、周辺には、「水沢県庁記念館」「旧登米警察庁舎」（現警察資料館）などもあり、観光物産館「遠山之里」では、食事もできる。

右：「旧登米高等尋常小学校」（現教育資料館）は国の重要文化財だ。



旧登米高等尋常小学校の扉のほとんどがビニールで仮補修されている
撮影：2011年5月2日



仲原正治

の

まちある記

観光物産館「遠山之里」で、地元の名物の「あぶら麩井」の昼食をとった後に南三陸町に向かった。南三陸町まで3 kmの表示を過ぎて、カーブを曲がると、そこには、跡形もない世界が待っていた。川沿いにあったはずの住宅、施設、そのほかの建物など、すべてが形を成していない。高台にいくつかの住宅が残っているのが見えるが、そのほかは、瓦礫の荒野が続いている。報道写真やテレビで現地を写した映像を見ていたが、現実は、想像していた以上で、その悲惨さに言葉も出ない。震災から2ヶ月経つので、瓦礫等が相当数処理されていると思われるが、この状態が海岸部まで延々と続いている。かろうじて、道路だけは通行できるようになっているが、自動車を駐車する場所さえない。河原の一部に自衛隊等の支援の車は見えるが、それ以外は通行する車だけが、黙々と続いている。

左：登米から南三陸町に入ると、川沿いの家屋はほとんど跡形もない。
撮影：2011年5月2日

右：かろうじて道路は通れるが、海に近くなるにつれて崩壊したコンクリート造の建物が目立つようになる。
撮影：2011年5月2日



屋上に人が取り残された映像が記憶に鮮明に残っている志津川病院、そして中心市街地と思われる地区にいくつかの鉄筋コンクリートの建物があったが、それも被災していて、残骸だけが残されている。写真を見ると耐震補強をしているが、津波の前では無力だった。

途中で駐車する場所もなく、クルマでゆっくりと走りながら、周辺を撮影したが、テレビで見ていた風景を目の前にすると、あまりの悲惨さに全員が絶句した。午後3時近くになっていて大潮の時期に重なるため海水が道路近くまで来ている。地盤が沈下してしまった場所では一部が海につかまってしまっている。

南三陸町の平坦な場所は、すべて破壊されつくされたこと、少し高台になった場所も広くないため、仮設住宅の建設地の選定が非常に難しいと感じた。隣の登米市に作ることも考えているようだ。また、港を含め、中心市街地は地盤から作り直していかないと、生活する基盤もない状態にあるといえよう。今後、行政や住民が中心となって街の再生を図っていくことになるが、簡単に再生するということが出来ないような現状である。

仲原正治

の

まちある記

左：南三陸町の中心市街地に無事な建物はひとつもない。
撮影：2011年5月2日



右：海岸部は施設が壊れ、地盤沈下している。
撮影：2011年5月2日

右：津波で被災した鉄骨の建物。
撮影：2011年5月2日



右：屋上に人が取り残され、自衛隊のヘリコプターで救助された映像が生々しかった志津川病院
撮影：2011年5月2日



仮面ライダーのまち 石巻市 2011年9月

★ 「仮面ライダー」の石巻市

石ノ森章太郎の生家は、宮城県登米郡石森町（現登米市中田町石森）にある。石巻市からは車で 30 分ほどの距離だ。登米は明治時代に登米県（後に水沢県）の県庁があった町で、コメの集積地として水運で栄えていた。旧水沢県庁庁舎、旧登米尋常小学校、旧登米警察署などの近代建築が残っており、静かなたたずまいの町である。石森町には「石ノ森章太郎ふるさと記念館」と章太郎の生家もあり、公開されているが、震度 6 強の震災被害を受け、生家は現在、公開休止となっている。

石巻市は人口約 16 万人、宮城県第 2 の都市である。江戸時代はコメの一大集積地として、明治以降は特に第一次産業である農業や漁業の町として栄えてきた。鳥取県の境港や気仙沼と同様に特定第三種漁港の指定を受ける全国的な漁港である。近年は第二次産業であるパルプ等の工業都市としても発展していた。しかし、近年のモータリゼーションの発達により中心市街地の都市基盤の立ち遅れや、大型店の郊外進出により駅前商店街では空き店舗が増加し、シャッター商店街が形成されていた。

こうした中で、20 世紀後半に市は新たに第三次産業（サービス・観光）に力を入れていこうと考え、市民が中心となり、まちの魅力づくりのテーマに登米出身の石ノ森章太郎を選び、1995 年に記念館を建設することを発表した。当初、この計画に市民の賛同は少なかったが、熱意ある市民が市民運動を展開し、96 年には「石巻マンガランド基本構想」を立ち上げ、本格的に「マンガの街」を目指して動き始めた。構想では「マンガや漫画的発想を地域活性化の手段として活用し、様々な交流を促進しながら、市民ひとり一人が「ロマン」＝夢を持てる石巻」を目指すことにしている。

石ノ森章太郎が 1998 年 1 月に 60 歳で急逝したことは、地元にとってはショックなことだったが、彼の遺志をついで 2001 年、石ノ森萬画館がオープンした。

市は石巻マンガランド基本構想を受けて 1999 年に中心市街地活性化計画を立て、2001 年には TMO (Town Management Organization) として、「街づくりまんぼう」を市民と協働で立ち上げた。現在、この会社が「石ノ森萬画館」の指定管理者として管理・運営を担っている。会社は資本金 6000 万円で石巻市が 50% を出資し、残りは公募で 128 の個人、団体、法人の出資によりつくられた。石巻市からの出向者はひとりもおらず、自主独立の精神で事業を進めている。

建物は宇宙船のイメージで作られ、約 2000 m² で総工費は約 20 億円、そのうちの半分を国の補助金でまかなっている。館には石ノ森章太郎作品の展示・収集のために

仲原正治

の

まちある記

約 2 万点の収蔵品があり、約 25 名のスタッフが、ワークショップや調査研究、来館者サービスなどを担っていた。年間の予算は 2 億 2 千万円で、そのうち市からの補助金は 5500 万円、毎年黒字を計上していた。毎年 20 万人の来館者を迎え、昨年 11 月には 200 万人の入場者を数え、少しずつ増えてきていた。展示部門のみ有料だが、歴史や交流エリア、図書館、マルチメディア工房などは無料となっている。

左：地震により被災した石ノ森章太郎ふるさと記念館
撮影：2011 年 5 月 2 日

右：1 階部分が津波被害にあった石ノ森萬画館、傾いて見えるが、当初からの設計で外観の被害は少なかった
撮影：2011 年 7 月 4 日



★ マンガロードと中心市街地活性化基本計画

JR石巻駅から石ノ森萬画館につながる商店街が中心市街地だが、ここを「マンガロード」と命名し、石ノ森作品のキャラクター像を数多く配置している。石ノ森萬画館には駐車場を設けず、駅からマンガロードを歩いてもらい、商店街の活性化を狙ってきた。しかし、駐車場が近くにないと、観光会社がツアーを組みにくいこともあり、後日、バス専用の駐車場を作り集客効果は上がったが、反面、商店街には立ち寄りなくなってしまう現象が生じた。マンガロード沿いには、観慶丸陶器店と旧東北実業銀行石巻支店のふたつの近代建築があり、町並みに色を添えている。マンガロードを中心に左右に寿町通りやアイトピア通りがあるがここも震災前から客は減少傾向になっていた。三陸縦貫自動車道の石巻河南 I C 付近に多くの大型商業施設ができ、登米市なども商圈にのみ込むなどしたことが主な原因だ。また、石巻駅前の「さくら野百貨店」が 2008 年には撤退を余儀なくされ、ますます客離れが加速した。郊外の大型商業施設がほとんど被災しなかったこともあり、現在もそちらに買い物が吸い寄せられ、マンガロードは、ほとんどの店が閉鎖状態になっている。最初に訪れた時は地元の蒲鉾店「白謙」が開いているだけだった。

市は中心市街地の魅力が十分に活かされず、商業活力の停滞と訪れる人の減少、高齢化の進行などもあり、まちとして必要な「住む」「働く」「学ぶ」「楽しむ」などの機能の集積と生活空間の再構築を図るため、『中心市街地の活性化に関する法律』に基づき、「石巻市中心市街地活性化基本計画」を立て、平成 22 年 3 月に内閣総理大臣の認定を受けた。

その内容は、目指すまちの姿として「彩り豊かな食と漫画のまち」を掲げ、①「萬

仲原正治

の

まちある記

画」「食・健康」「交流」による賑わいのあるまちづくり ②石巻の良さを凝縮した中心市街地を楽しく回遊させるまちづくり ③安心して住み続けることのできるまちづくり という三つの基本方針だ。これを進めていく矢先の2011年3月11日に東日本大震災を迎えることになった。

左：マンガロードは震災から5か月経っても、まったく建物の解体や改修等が行われていない箇所も多い。

撮影：2011年8月11日

右：観慶丸陶器店。交差点の信号は9月まで復旧せず、全国から派遣された警察官が手信号で交通整理を行っていた。

撮影：2011年7月4日



★ 市町村合併と被災状況

石巻市は2005年の1市6町の合併により、北は南三陸町や登米市、西は東松島市と接し、東は牡鹿半島まで含む約555km²となった。女川町だけは原子力発電所があるため、合併区域に入っていない。

原子力安全・保安院のホームページによると、原子力発電所の必要な立地条件として、「原子炉はその安全防護施設との関連において、十分に公衆から離れていること」となっており、その確認事項では「敷地：原子力発電所の位置、広さ、敷地境界などの調査結果から、周辺公衆との離隔の確保を判断します。」「周辺の人口分布、産業活動、交通運輸などを調査し、原子力発電所の安全性に影響がないことを判断します。」となっている。

原発の立地は、基本的には過疎の場所である必要があり、東京などの大都市では設置できないことになっている。この原発の立地条件と、1974年に施行された電源三法（電源開発促進税法、発電用施設周辺地域整備法、電源開発促進対策特別会計法）により、発電所の立地地域に利益が十分に反映されるようになっており、それを独占的に享受するため女川町は石巻市と合併しなかったと思われる。

石巻市は合併により雄勝町（東京駅の屋根材のスレートの産地）や、鮎川町（鯨の町）なども含む大きな地域となったため、海岸部が甚大な被害に見舞われた。死者・行方不明者は3,979人（2011年10月11日現在）で、東日本大震災で一番多くの犠牲者がでたため、現在人口は154,306人（2011年7月末現在）となっている。しかし、東日本大震災により、行方不明の方や登録上の住所から離れ避難所で生活している方等が相当数含まれているものと予想されるため、震災前よりも1万人以上減



石巻河南IC付近のショッピングセンターには多くの客が来ている。

撮影：2011年9月22日



旧さくら野百貨店を市役所に転用した石巻市役所は津波で1階部分が浸水し、3日間は水が引かなかった。入口には仮面ライダー一像が設置されている。

撮影：2011年9月22日

仲原正治

の

まちある記

少したと推測される。仮設住宅はほぼできあがり、震災7か月後の10月11日に避難所を閉鎖したが、まだ、落ち着き先の決まっていない人もいる。

産業の中心のひとつである漁業だが、船は岸壁に接岸できるが、加工工場やバックアップ施設がないため、港から仙台や東京に直接もって行くことになる。水産加工ができないことで、多くの就業の機会が失われている。

中心市街地は、建物の一階部分が津波による被害を受けているが、活用可能なものも多い。しかし、高齢化が進んでいる地区では地域再生に必要な「体力・気力・経済力」が湧いてこない状況や建築制限で動けないなど再生が厳しい状況が続いている。また、建物撤去費用は公費負担されるため、壊す家も多くなっている。

石ノ森萬画館の被害は、1階部分が中心で、建物の本体は問題がなかったが、電気、空調などの設備はほとんど使えず再開の見通しが立っていない。そのため、2階以上にあった原画などは、石森プロに返還しているとのことだ。現在閉館中で、収入がないため、職員の大半は解雇している。早く再生させて、職員に戻ってきてもらい、まちの活性化に寄与したいと(株)街づくりまんぼうの代表取締役西條允敏氏は悔しそうに語っていた。試算では補修費に3億数千万円かかるとのことだが、財源が確保できないため再生の見通しが立っていない。被災地では、仮設住宅など被災者の生活が最優先されるため、どうしても文化芸術関係は後回しになってしまうのが現状だ。

右：石ノ森萬画館から撮影した津波の写真
撮影：2011年3月11日
石ノ森萬画館提供



仲原正治

の

まちある記

左：震災の翌日の石ノ森萬画館周辺
撮影：2011年3月12日
石ノ森萬画館提供

右：震災後の石ノ森萬画館のある島は、ほとんどの建物が流されている。日和山公園から見る。
撮影：2011年3月
石ノ森萬画館提供



右：女川町の被災風景。
4階建ての建物が基礎から倒れている。
撮影：2011年7月4日



★ 市内に拠点をつくり文化交流事業を進める被災地支援

震災以降、気仙沼、南三陸町、石巻、仙台、いわきなど、何回か被災地を訪ねた。しかし、自分は何ができるのか見えない状況が続いた。岩手県や宮城県では津波により街がなくなっている地域が多く、人力では無理だというあきらめの気持ちが先にたった。いわき市でも海岸部では壊滅した地域が多くあり、手がつけられない状況で、そのうえ原発による放射能被害や風評被害が大きく、これも人力ではとうてい覚束ないと思っていた。そうした悩みを抱えている時期にも、ボランティアは現地で炊き出しや汚泥の掻き出しなどを進めていて、体力のない60歳男はジレンマを感じてきた。

そうしたときに、アーティストの遠藤一郎氏が、私が担当する横浜の黄金町を訪れ「被災地と横浜を結んで夢を乗せたバスを走らせたい」という提案をもってきた。横浜の人にも被災地の人にもバスの車体に「自分の夢」を書いてもらい、被災地と横浜を往復するという、アーティストでなければ発想しない提案だった。かれはクルマに泊まりながら、被災地に出向き、避難所で子供と一緒に美術のワークショップを行い、水に浸かった家にペイントをして美容院を復活するなどの活動をしていた。バスを走らせても何の役にも立たないかもしれないが、もしかしたらこれをきっかけに、何か新しいことが始まるかも知れない。あわせて黄金町で進めているまちづくりのノウハウを石巻市で活かさないかと考えた。黄金町は7年前まで250軒以上の売買春宿が集積していた場所で、小さな家屋がたくさん連なっている。そこを改築し、アーティストやクリエイターを入れて、町の再生を進めており、全国的に地域再生のモデルとなっている。その改修のノウハウを石巻でも実践できないか。現地に拠点をつくることで、交流が始まり、少しでも支援できないだろうか。

「そうだ、石巻市の被災した建物を借りて 拠点を作ろう」

黄金町エリアマネジメントセンターの事務局長山野慎吾氏と私は一緒に横浜と石巻の文化芸術交流拠点をつくることを決意した。10月には、石巻市内に拠点を借り、そこを改築し活動を始めるつもりだ。むろん、石巻市や商工会議所、観光協会などと協働を進めていく予定だ。遠藤一郎氏の夢を乗せたバス「未来へ号」は東北地方だけでなく、日本中を廻っている。黙ってみているのではなく、何かに参加することにより、何かが始まるのではないかという気持ちに乗せて。

石巻市では、震災復興の槌音が聞こえてこない場所も多い。また、道路や家屋などの再生が急がれ、文化芸術の施設や漫画の施設などは後回しにされる可能性も強い。しかし、20年、30年先を考えたときに、将来の都市像をどう考えるのか。その答えを石巻市は「彩り豊かな食と漫画のまち」というキャッチフレーズで決めている。震災の復興に当たっても、インフラの整備とともに、今からこうしたまちづくりに投資しておくことも必要だ。石巻市は漁業で栄える都市である。この漁業を中心に据え、「食」文化と「文化芸術(漫画)」を中心に、それを盛りたてるためのソフトやイメージづくり、街の歴史や文化を掘り起こすまちづくりを少しでも早く始めていくこと、それが未来へ続くロードマップに思える。

仲原正治

の

まちある記

左：横浜・黄金町地区で
神奈川トヨタグループ
の支援を受けて、走り始
めた「未来へ号」。
撮影：2011年8月28日

右：「未来へ号」に描か
れた、被災地の方々の未
来へのメッセージ
撮影：2011年8月28日



マンガロードなどに設
置されたキャラクター
たち
撮影：2011年9月22日



石巻日和アートセンター 2011-2013 年度

2011 年度、国では、「新しい公共支援事業」という名称で、被災地支援関係のプログラムについて県を通して募集をしていた。そこで、黄金町エリアマネジメントセンターでは、石巻での活動を進める「石巻文化芸術交流プログラム事業」を立ち上げるために、これに応募した。期間は2年間。予算は2年間で1,000万円だ。幸いにして、「神奈川県新しい公共の場づくりのためのモデル事業」として採択された。事業の内容は、横浜市と石巻市において、創造的な活動による街の再生を目指し、双方に拠点を設けることで、アーティストや建築家、クリエイターの交流促進を図り、様々な情報やノウハウを共有し、被災地復興の一助になることを目的とする事業だ。

そのために、先行事業として、2011年9月から開催されている「黄金町バザール2011」において石巻との協働プログラムを開始するため、遠藤一郎氏によって、石巻—横浜間のシャトルバスの運行を進め、アーティストの派遣やワークショップを実施してきた。

左：石巻市内で先行的に進んでいたシャッターに絵を描くプロジェクト
撮影：2011年7月4日

右：派遣したアーティストが避難所でワークショップ
撮影：2011年7月4日



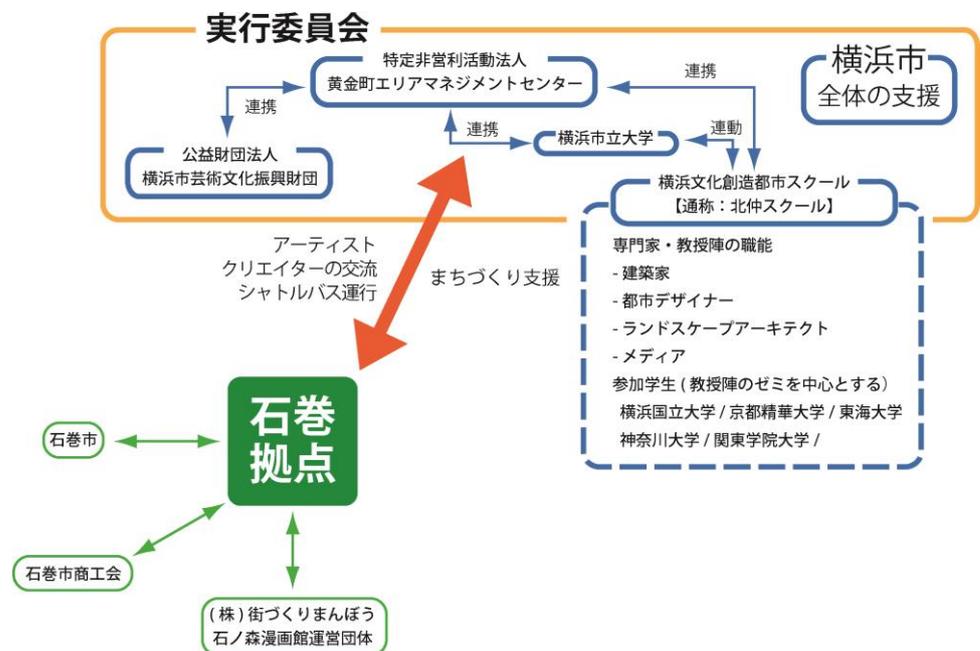
また、拠点の確保と整備、石巻の活動団体、まちづくり担い手との連携・協力体制の形成することとし、各団体との調整や拠点づくりを進めていった。

こうした中で、事業的には、建築家、都市デザイナー、ランドスケープアーキテクトなどの専門家を派遣し、まちの将来像の作成、まちの再生、復興にむけたビジョンを共有することを目指した。

同時に地域の空き店舗の活用を進めるとともに、拠点を通じて人材育成、情報の交流促進を図るため、拠点のコーディネーターが支援に関するさまざまな相談を受け、石巻市などに繋ぎ、支援プログラムを作成、実践することを目的とした。補助金は2年間だが、拠点は5年間継続して賃貸借し、地域の人たちと横浜の交流拠点にし、多くのボランティアや専門家を受け入れて、被災地支援を進めたいと考えた。

さっそく、現地に飛んで、石巻市、観光協会、商工会議所を訪ねて、趣旨を説明して協力を頼んだ。どこの部署も協力的だったが、なかなか適当な物件が見当たらなかった。当初は早めに建物を借りて、すぐにでも活動を開始しようと考えていたが、1階部分が浸水していて、適当な規模の建物が少ないこと。見つかったも、地元の人はその物件を借りたいとダブってしまい、地元を優先せざるを得ないなど、物件探しに苦労を重ねた。ようやく2011年11月下旬に、借りることができたが、1階部分は水没したため、設備や内装について、全面的に見直さなくてはならない。予算は500万円が限度となっている。そこで、黄金町で活動している大工仕事も苦にしないアーティストの増田拓史氏を派遣して、内装、設備等のコンバージョンをすべて彼に任せることにした。彼は、様々な人の知恵を取り入れて食事を造るプロジェクトなどを行ってきており、地元の人との協働作業が得意なアーティストなので、2か月半かけて、建物のコンバージョンを進めてくれた。このプロジェクトをきっかけに、彼は黄金等地区から石巻に移住して、現在も、石巻で活動している。

このプログラムを実現する組織は実行委員会方式とし、「横浜・石巻文化芸術交流プログラム実行委員会」を立ち上げ、構成員として、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター、横浜市立大学、神奈川県立大学、関東学院大学、東海大学、京都精華大学、横浜市、(株)街づくりまんぼう(石巻・石ノ森萬画館管理者)が入り、オブザーバーには石巻市商工観光課に入ってもらった。



(横浜・石巻文化芸術交流プログラム実行委員会の構成図)

仲原正治

の

まちある記



左：改築前の建物1階は津波で洗われたため、壁にはカビが生えていた。そのため、1階部分の壁を全部取り替えた。改築前。
撮影：2012年1月13日

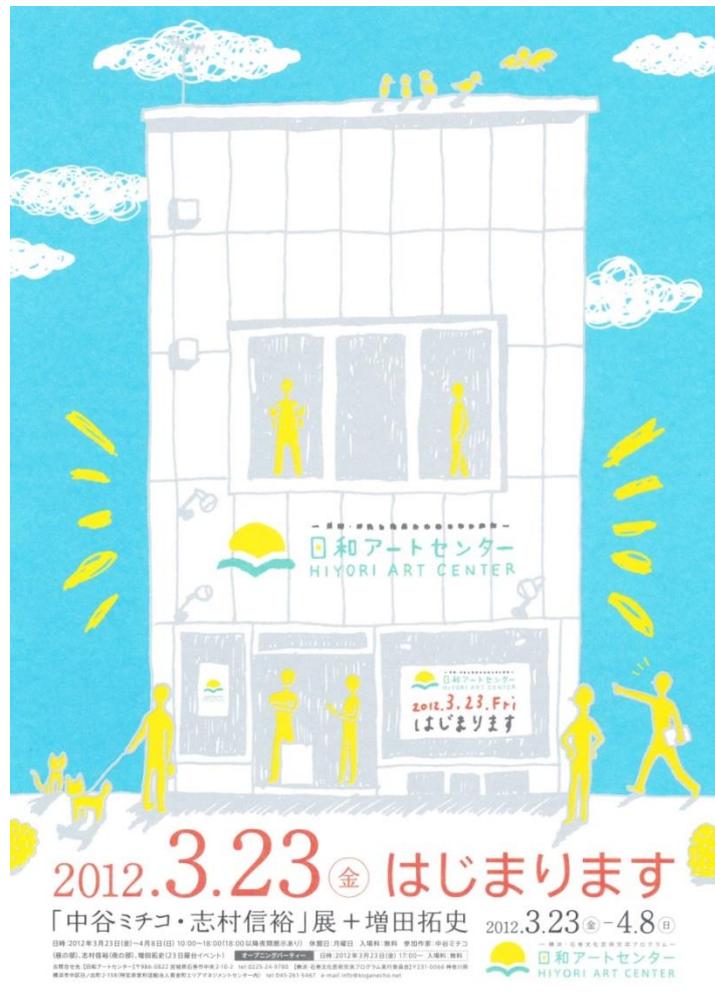


右：改築中のアートセンター2階に寝泊まりして改築を進めた。
撮影：2012年1月13日

右：日和アートセンターのオープニング展のちらし

建物の内装も3月には完成し、拠点の名前も「日和アートセンター」という名前に決めた。「日和」というのは、石巻市にある「日和山」という山の名前から引用した。この山頂には日和山公園があり、震災時にはここに門脇小学校の生徒が避難し、全員無事だった守り神のような山だ。

2012年3月23日に、横浜から現地に駆けつけたアーティストの中谷ミチコ氏と志村信裕氏も参加し、最初の展覧会がオープンした。「日和アートセンター」は、国内外のアーティストを石巻に招くアーティスト・イン・レジデンス施設であり、石巻市と横浜市をつなぐ文化芸術交流プログラムの一環として、創造活動によるまちの再生を目的に様々な機関と協働した展覧会やワークショップ等の企画運営を進めていくことにした。



仲原正治

の

まちある記

左：改築が完了した日和アートセンター
撮影：2012年3月23日

右：日和アートセンターの
入り口
撮影：2012年3月23日



左：防犯を意識して、入口
に設置した志村信裕の映像
作品。
撮影：2012年3月23日

右：壁一面に描かれた中谷
ミチコのドローイング。
撮影：2012年3月23日



オープニングパーティには、
横浜の関係者、地元
の方々も参加して楽しく
行われた。
撮影：2012年3月23日



石巻市に拠点を造ったが、これをどういうふう運営していくのか、非常に難しい問題があった。まだ、地域の方々とも知り合いになったばかり、石巻にアーティストやクリエイターがいるのかわからない。運営していくためには、責任者を決めなければならない。そんなとき、黄金町で臨時スタッフとして働いていた立石沙織さんがぜひとも石巻で活動したいというので、まずは3か月間程度の間、何ができるのか任せることにした。全体の責任者は黄金町エリアマネジメントセンターの山野

仲原正治

の

まちある記

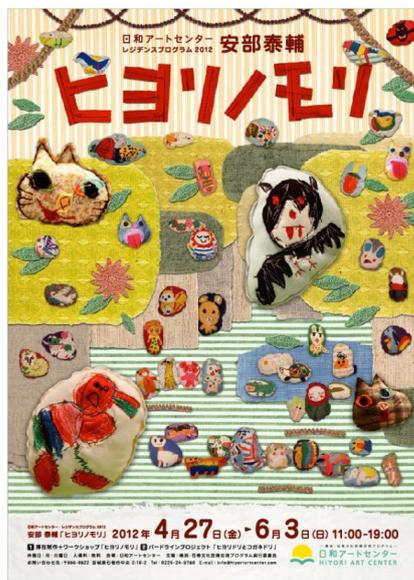
事務局長になってもらい、2~3か月に1回程度は現地に行くことにした。筆者も言
いだした責任者なので、2か月に1回程度は行こうと考えていたし、実際に行っ
ている。

しかし、当初は、宿泊施設がまだ少なくて、石巻で打ち合わせて、夜、バスで仙台
に戻り宿泊することになるため何しろ効率が悪い。

そうした中で、日和アートセンターの2階には宿泊できるスペースも造ったので、
そこにアーティストが滞在して、製作し、地元とのワークショップなどを行い、展
覧会を開催していくという方式になった。オープニングの展覧会の後は、大分県
のアーティストの安部泰輔氏に、石巻の子供たちと一緒に人形を作るプロジェクト
を進めてもらった。自分の描いた絵を古切れを使って人形にするという企画で、会場
には放課後に訪れるたくさんの子供たちを楽しんでもらった。

左：安部泰輔の展覧会「ヒヨ
リノモリ」のチラシ

右：安部泰輔とのワークシ
ョップで制作する子供たち
撮影：2012年5月



右：石巻の日和アートセ
ンターで、年数回、実行
委員会が開かれ、横浜か
ら来た委員と地元の委員
で事業や予算について協
議を進めた。
撮影：2012年7月21日



仲原正治

の

まちある記

立石さんがアートセンターの管理者となって進める中で、地元高校の美術の先生やアーティストも何人かは常連のように出入りするようになり、少しずつ、地元のアーティストの発表の場としても使われるようになっていった。また、黄金町からの企画も地元との協働のワークショップや展覧会を中心に進め、石巻のアーティストの展覧会を黄金町で行うなど、相互に交流することを進めてきた。まだ、市街地の再生は進まない中で、あっという間に2年間の年月が過ぎていった。

2013年度からは神奈川県補助もなくなるため、横浜市に対して、このプロジェクトの支援をお願いしたが、財政的に無理との回答だったため、自力で施設の運営を進めていかななくてはならなかった。そのため、2013年度は、NPO黄金町エリアマネジメントセンターで財政的な支援を行ったが、立石さんが結婚し、横浜に戻ってくるため、2014年度からは、日和アートセンターを地元で活用してもらう方向で調整を進めた。

幸い、その場所を借りたいという地元の方も現れたため、2013年度で一応、「横浜・石巻文化芸術交流プログラム」を終了させることにした。しかし、その後も地元のアーティストとの交流は続いていて、できればもう一回、復活させたいと考えている。

そして、石巻に拠点を移した増田拓史氏は、新しいスタジオ兼住居をつくり、いまでも活動を続けている。

右：2012年度に行われた企画展「L PACK TOUR」のチラシ



L PACK TOUR

友達の本棚や、プレーヤーに入っている曲を見るのは知れぬものを見るようにワクワクする。僕たちがここにいて見ているモノと、あなたが見ているモノはきっと違うけど、ただ歩くだけで世界が変わる方法を僕たちは知りたいと思っている。

lpack がここで見ている視点を体験出来るツアー
7月6日(金) - 8月5日(土)
価格設定：2歩1円
受付方法：シートに記入の上直接お申し込みください。
例：約1時間程度の散歩 / 1.2km / 2000歩 / ¥1,000

CAMP キャンプ

この商品はアトリエショップ エルキャンプに朝までいることができます。一日一組限定ですが、何人でもかまいません。特別なことは何もありませんし、あるかもしれません。楽しい一夜にしましょう。
¥5000 - / 夜から朝まで

私たちは普段ここで食事をしています。お風呂もここで、洗濯もここで。制作もここでし、販売もここでしています。横浜の家ではなく、ここで全てをやっています。寝るのもここで。この期間は展覧会期間でもあるのですが、生活している期間でもあります。

仲原正治

の

まちある記

左：2012年度に行われた水川千春展では、作家が石巻の海と雨の水を使ってあぶり出しの絵を描いた。その展示会のチラシ

右：会場風景と作者
撮影：2012年8月



中学一年生の石巻ボランティア 2012年11月

震災から1年9か月経った。まだまだ、復興への道のりは険しい。特に、原発を抱える福島県は、まちづくりの一步も踏み出せずに、手がついていないことがたくさんある。一方、津波被害が著しい三陸地方は、いまだ、がれきの処理が進んでいない場所も多く、地盤沈下でまちづくりができない市町村も多い。今回、筆者の親友、浅川和良、祐子夫妻、子息の浅川陽くん(中学1年生)と復興を目指す石巻市を訪ねた。

★ 仙台から登米市に向かう

11月15日(木)午前10時過ぎに仙台に着く。陽くんは列車の中では、これから被災地に行くことになるため少し緊張気味だったが、駅に着くとシャキッとて、母親の荷物を持つ役割を担っている。

レンタカーを借りて、登米市(とめし)登米町(とよままち)を目指す。

1年半前に訪れた旧教育資料館(旧登米尋常高等小学校)は、まだほとんど修復が行われていない。公開はしているが、昨年訪ねた時と同じように、壁などの亀裂は修復されていない。窓ガラスはビニールで暫定的に風雨を防いでいる状況だ。重要文化財である旧教育資料館ですら、復興工事費が廻ってこない現状を見ると、復興予算はどこで使われているのだろうか。こうした建物ではなく、直接的に被害が大きい地域で使われているのだろうか。

登米町は「みやぎの明治村」と言われているように、明治22年建築の警察資料館(旧警察署)、水沢県庁記念館(明治5年の県庁舎—当時は水沢県の県庁所在地だった)、鈴木家住宅(春蘭亭)など、見どころが多い。しかし、まったく修復されていない建物も多い。

いくつかの建物を廻ったあと、旧教育資料館の隣の「遠山之里」で昼食をとる。宮城県特産の油麩を使った「あぶら麩丼」や「はっとう汁」を食べる。「はっとう汁」は「すいとん」や「ほうとう(山梨県)」「お切込み(群馬県)」と同じように小麦粉を練って薄く延ばしたものが野菜汁に入っている郷土料理だ。食事を済ませ、登米町から、国道398号線(元吉街道)を約30km走り、南三陸町を目指す。

仲原正治

の

まちある記

左:「旧登米警察庁舎」(警察資料館)は1889年に建てられ1968年まで登米警察署として使われていた。一部復元されている
撮影:2012年11月15日

右:鈴木歯科(旧家老職だった家)の門構えは震災後傾いたままになっている。
撮影:2012年11月15日



警察資料館で牢獄の疑似体験をする友人の浅川陽くん 撮影:上田祐子
2012年11月15日

★「南三陸さんさん商店街」でステキな笑顔に会う

登米から南三陸町に入ると、1年半前に訪れた時と同じように、家がほとんどない。高台に家は残っているが、川沿いの家屋は流され、斜面の木々も立ち枯れている。町に入り少し進むと川沿いに仮設店舗「南三陸さんさん商店街」がある。海岸からは2kmくらい陸に入った場所だが、ここもすべて家が流され、その後、整地して仮設店舗を立てている。魚屋、雑貨店、飲食店、物産店のほか、床屋、電気屋、整骨院など日常生活に必要な店も並んでいる。

店に入ると、「こんにちは、どこから来られたの」と丁寧な言葉で聞かれる。陽くんが東京からと答え、「遠いところから来てくれてありがとう」という答えが返ってくる。海苔などを売っている海産物店の女性がステキな笑顔で商品を紹介してくれ、来てくれたことを本当に喜んでくれた。彼は自分の小遣いでワカメ類など数点を購入。他の店でも「南三陸町」のロゴの入ったパーカーを購入した。被災地で、何かを買うという行為も支援の一環だ。

海に近づけば近づくほど、建物の土台だけが目立ってくる。南三陸町防災庁舎周辺は、1年半前とあまり変わらない状況で、建物がそのまま残っている。この地区のガレキは撤去が終わっていない。それよりも重大なのは地盤が沈下していて、いたるところに水たまりがあり、満潮時には海に没してしまうことだ。自動車の残骸も多く残っていて、ガレキ処理が進んでいないことを伺わせる。この地域のガレキの放射線量は規定内でまったく問題がないのだが、受け入れてくれる自治体は少ない。南三陸町を後にして、石巻市立大川小学校に向かう。全校生徒108人の内、死者行方不明者84名、多くの命が失われた場所だ。近代的な大川小学校は避難所に指定されていたこともあり、近くの川を津波が遡り、ここを津波が襲うとは思っていなかった。学校の前には、犠牲者を慰霊するための母子像が建てられ、献花が絶えない。訪ねた時も地元の人が花を手向けていた。陽くんを始め、みんなで合掌して、冥福を祈った。

石巻市の日和山のふもとにある門脇地区と隣接の南浜地区は、津波でほとんどの住



「南三陸さんさん商店街」
入り口
撮影2012年11月15日



商店街で購入したパーカーを着ている陽くん
撮影:2012年11月17日

仲原正治

の

まちある記

宅が壊滅してしまった。この地域は草で覆われ土台などが見えにくい、整地などの作業はまったく手が付けられていない。住宅地としての再生は断念し、祈念公園を作るとともに、水上交通等による水面利用の拠点として整備する計画になっている。

門脇小学校は津波の後の出火で建物のダメージは大きかったが、震災時に生徒が裏の高台にある日和山公園に避難し、無事だった。大川小学校の惨劇と門脇小学校の対応を比較することは意味のないことだとわかっている、どうしても違いを考えてしまう。



地盤沈下の激しい南三陸町の海岸部
撮影：2012年11月15日

左：南三陸町防災庁舎周辺のガレキは震災から1年8カ月経つが、ほとんど撤去されていない。
撮影：2012年11月15日

右：津波から1か月半の南三陸町防災庁舎
撮影：2011年5月2日



左：慰霊碑が建てられている石巻市立大川小学校
撮影：2012年11月15日

右：震災後焼けた門脇小学校の全景、裏山が日和山公園。
撮影：2012年11月16日



★ ボランティアの難しさ

浅川陽くんの通っている学校は暁星国際学園という小・中・高校一貫教育を行っているキリスト教精神を基本にした全寮制の学校だ。生徒の個性を尊重し、自主的なことを率先して実現できるようなカリキュラムを組んでいる。陽くんの通う「ヨハネ研究の森コース」では2011年度に「東日本大震災」をテーマに生徒が自主的に勉強し、何ができるのかなどを学ぶ中で、実際に被災地に行ってボランティアを行うことを決めていた。陽くんもぜひとも被災地でボランティアがしたいと応募したが、まだ中学1年生ということもあり、高校生や中学の高学年が選ばれ、あえなく落選。それでもどうしても行きたいという気持ちが強く、筆者が被災地に頻繁に行

仲原正治

の

まちある記



ピースポートセンターからは毎日多くの若者がボランティアに出発している
撮影：2012年6月25日

っていると聞いて、本人と両親に頼まれ今回のボランティア旅行を企画した。彼は中学1年生ながら170cmを超える背丈を持ち、サッカーやバスケット、合気道なども楽しんでいるスポーツ少年でもある。

石巻で活動している人たちに、何かボランティアがないかを尋ねると、中学1年生なので、力仕事は難しいのではないかと、仮設住宅などでのお年寄りの話し相手も難しいのではと、なかなか見つからなかった。11月17日にRe OPENする石ノ森萬画館であれば、いろいろな仕事があるとのことで、館の運営団体である「株式会社街づくりまんぼう」の西條社長に相談して実現したものだ。

実際に、震災直後からボランティアに入っているピースポートのメンバーに話を聞くと、現在、仮設住宅に住む孤立している高齢者に地域になじんでもらうことを進めているが、なかなか難しいとのこと。仮設住宅は抽選で入るため、今まで暮らしていた近隣の見知った人がいない状況になる。そのため、新しく住み始めた人たちと新しいコミュニティ、人間関係をつくることになるが、高齢者にとっては精神的に大きな負担になる。ともすれば引きこもってしまう人もいて、出会いの場を作ることや、訪問して話し相手をし、様々な相談に乗ることになる。訪問し、話を聞くということは、何回も訪ねて、信頼関係を作っていくなくてはならない。こうしたことは時間がかかり、1日だけのボランティアではできないし、任せられないというのが実情だ。

★ 石ノ森萬画館でボランティア

陽くんがボランティアを行うに当たって、筆者も両親もまったく手を出さないことにして、16日(金)の朝8時半過ぎに石ノ森萬画館に行き、西條社長に彼を託すことにした。初めて会う人にきちんと挨拶をして、担当者から仕事を教えてもらい、自分の役割を考え、一緒に働く。近くに頼る人がいない状況にしておくことが必要だと思った。

筆者と浅川祐子さんとは一路松島に向かう。松島では多くの観光客が遊覧船を楽しみ、観光客は旬の牡蠣に舌鼓。平和な時間が流れている。松島地区も津波に襲われたが、数ある島々が防波堤となっていたため、被害は少ない。海岸に近い瑞巖寺も津波被害は受けていない。松島と石巻の間にある海水浴場の野蒜(のびる)海岸や東松島町は被害が甚大で、海岸近くのホテルは閉鎖されている。海岸には高さ4m余りの防波堤があるが、津波は簡単にそれを乗り越えてきた。

女川町では、基礎が壊れた建物が数棟、そのままの状態に残されている。周りは急ピッチで整地がされているが、地盤が下がったこともあり、今後、地盤のかさ上げから始めなくてはならない。高台にある女川町立病院の駐車場の片隅に慰霊碑があり、ここでも合掌。津波の被災地を訪ねるたびに、犠牲者の数の多さ、家族、親族、



松島湾一周ツアー観光船には金曜日にも係らず多くの観光客が乗船していた。
撮影：2012年11月16日



紅葉が見ごろの青龍山瑞巖寺境内。ここは伊達正宗ゆかりの寺。庫裡は平成30年まで10年かけて大修理中だ。
撮影：2012年11月16日

仲原正治

の

まちある記



松島に近い海水浴場の野蒜海岸は防波堤を超えて津波が襲った。
撮影：2012年11月16日



野蒜海岸近くの墓地はまだ倒れたままの墓も多い。
撮影：2012年11月16日

右上：震災から4か月後の女川市街地
撮影：2011年7月4日

右下：震災から1年8か月後の市街地は相当数の建物が撤去されたが、基礎から壊れた建物はまだそのまま横たわっている。
撮影：2012年11月16日

友人たちの悔しい思いが伝わってくる。女川町付近や石巻市の海岸部のリアス式海岸には小規模な漁港がたくさんあるが、なかなか復興が進んでいない。筆者らが松島などを巡っている間、陽くんは石ノ森萬画館の閉鎖中に建物を覆っていたベニヤ板に書かれた全国からのメッセージを周辺に設置する作業をしていた。後で一緒に作業を行っていた担当者に聞くと、陽くんは釣りが得意で結び方を心得ていたので、効率よく設置できたと評価していた。また、復興マルシェ（仮設店舗）ではテント張を行うなど、大人顔負けの作業をしていた。ボランティア終了後は、西條社長への報告を行い、当日の内容と感想を聞いてもらった。



仲原正治

の

まちある記

★ 浅川陽くんのメッセージ（今回のボランティアを終えて感じた事）

僕は、東日本大震災で被災した石巻に行って、ある事が心に残りました。

それは「笑顔」です。

さんさん商店街、復興マルシェ、石ノ森マンガ館の人達は震災でとてもつらかったはずなのに、いつも笑っていました。

もしかしたら、全々東京の人より笑顔かもしれません。もちろん、意識している所はあると思うのですが、それでもみんなステキでした。

このボランティアで自分を取り戻せた気がします。いろいろな人と関わっていくなかで、自分を見詰め直すのは、けっこういい事だと思います。

大川小学校、門脇小学校の子供達は、助かった子もいれば、亡くなった子もいる。

特に大川小などは、ほとんどの子が死んでしまいました。

小学校もとても見れるようではなかった。

それでも、みんな復興のためにがんばっている。

このボランティアは、僕の心に温もりも与えてくれたけれども、ちょっとグサツときたものもありました。

今回の中間休暇の今日の学習を 1 枚にしたのも、いろいろな事を書いてもいいけど、ひとつにしぼって一番感じた事を書きました。

とっても思い出に残ったボランティアでした。

一生忘れないものになり、ずっと大切にしていきたい思い出です。

これからも、ボランティアをしたりして、人のことを笑顔に出来ればいいです。

(原文のまま)



特別に許可を得て撮影させていただいた仮面ライダーと陽くんのツーショット。

撮影：2012年11月15日

左：陽くんが行った全国からのメッセージが書かれたベニヤ板の設置現場。
撮影：2012年11月17日

右：ボランティア後に西條社長らと記念撮影。
撮影：2012年11月16日



★ボランティアをした日は陽くんの誕生日

11月16日は浅川陽くんの13歳の誕生日。石巻の中心市街地唯一のフレンチレストラン「おおたや」で日和アートセンターの立石沙織さん、ISHINOMAKI 2.0の代表理

仲原正治

の

まちある記



「おおたや」で地元のメンバーと一緒に陽くんの誕生日を祝う。
撮影：2012年11月16日

事で地元在住の松村豪太さん、横浜から被災地に拠点を移し活動しているアーティストの増田拓史さんを交えて、誕生パーティを開催した。

日和アートセンターは、筆者が横浜黄金町エリアマネジメントセンターと協働で中心市街地の空き家を借りて、アートスペースにした場所だ。派遣されたアーティストが1か月単位で住み、製作し、展覧会を開催する。滞在期間にアーティストは地元の子供たちとのワークショップなどを行うことにしている。昨年12月から3か月間かけて、増田さんが中心になって改築をして2012年3月にオープンした。オープン後8か月で4回の企画展を行っている。

増田さんは現在、「堤防を建設する前の情景を記録するプロジェクト」を進めており、舟に乗って、川岸の風景を撮影したりしている。今回の津波で被災した北上川の川岸は、プロムナード化計画（いしのまき水辺の緑のプロムナード計画）が進められていて、10年間で様変わりするため、これを記録して作品としようという試みだ。



ISHINOMAKI 2.0の拠点。建築家やデザイナーが地域と共同で事業を進めている。市内にはこうしたボランティア拠点が数か所ある
撮影：2012年3月23日

ISHINOMAKI 2.0は東日本大震災を経験した石巻を、震災前の状況に戻すのではなく、新しいまちへとバージョンアップさせるために設立され一般社団法人だ。メンバーには地元の若い店主やNPO職員をはじめ、建築家、まちづくり研究者、広告クリエイター、Webディレクター、学生など様々な職能を持つ専門家が集まっている。こうした活動で問題になってくるのが、やはり経済的な問題だ。NPOなどの活動については、国や自治体の支援は少なく、トヨタ財団やメセナ協議会など企業の助成金を獲得していくのが普通だ。一方で、国の復興関連予算が数百億円規模で流用され、まったく関係のないことで使われていることに怒りを禁じえない。日和アートセンターは来年3月までは神奈川県補助などで運営できているが来年度からはまったく財源の見通しが立っていない。それでも運営していく場合は、様々な助成団体に助成金の申請を行い、募金活動をして運営資金を調達するほかない。今、支援してくれる企業、団体、個人を募集している。

彼らの経験や現在の石巻の状況を陽くんは、食い入るように聞いている。大人はワインも入り、楽しい時間を過ごしているが、中学一年生の彼にしてみれば、見知らぬ人との会話は緊張感がある。しかし、いろいろな人と話すことは新鮮であり、被災地で生の声を聴ける機会があったことは、これからの人生に何らかの影響を与えるはずだ。

★石ノ森萬画館 Re OPEN

石巻市が「マンガの街」を目指して石ノ森萬画館をオープンさせたのは2001年だ。昨年10周年を迎えるはずだった。しかし、震災による津波で建物の本体は残ったものの、設備関係は全損してしまった。今回は国の補助金を入れて約6億円の予算

仲原正治

の

まちある記



石ノ森萬画館 Re OPEN 当日配られたパンフレットの表紙

で復興工事を行っている。どこの被災地でも、生活の再建や道路などのインフラ整備を最優先にしている、文化や芸術関係の復興は後回しにされるのが普通だ。石巻市でも、市民会館や市民文化センターなどはまだ復興の見込みが立っていない。石巻市は「マンガの街」の復活、市民にとってのシンボルである萬画館を再生させることによって雇用を創出し、より多くの方々に来てもらい、石巻の経済を立て直すという意味合いも込めて、今回の工事に踏み切ったと思われる。被災後、解雇されていた約 25 人の職員も、ほとんどの人が職場に戻って再開に向けて働いていた。展示室などの工事の一部は終了していないため、今回は開放できる場所を中心に一時的に開館し、2 月 12 日には工事を再開、本格的なリニューアルオープンは 3 月 23 日に予定されている。

11 月 17 日(土)13 時、あいにくの小雨模様の中、石巻市長の挨拶を皮切りに式典が始まった。周辺には 1000 人以上の市民が取り囲んでいる。萬画館を支援してきたマンガジャパンの代表里中満智子さんの挨拶に続き、西條社長を始め萬画館のスタッフが勢ぞろいして、館のオープンに向けてのお礼の言葉を述べ、いよいよテープカット。歴代の仮面ライダーが参加する中、テープカットが行われ、市民、観光客が次々に萬画館に入場していく。当日は、無料開放日であり、全体では 4000 人近い客が訪れたが、館全体の収容人数は 700 人程度なので、入場制限する事態となっていた。

右：当日配布されたパンフレットに掲載された復興までの記録写真など

2011.3.11 —— 悪夢が襲った・・・
石ノ森萬画館は 6m を超える津波に襲われ 1 階部分が全壊。5 日間にわたり約 40 人が避難していた。

津波襲来直前の萬画館前
館内も大量の瓦と瓦礫で覆われた

萬画館の復活を信じて、必死に片付けを行った。

震災から 1 年 8 ヶ月
皆様の激励と支援に後押しされて、
やっと開館することができました。

感謝

仲原正治

の

まちある記

左：多くの人で賑わう石ノ森萬画館 Re OPEN 当日のマンガ館前広場。
撮影：2012年11月17日

右：式典であいさつをする西條社長他スタッフ。会場内外から大きな拍手がわき上がった。
撮影：2012年11月17日



★被災地支援は誰でもができる

被災地を廻って、いつも思うことは、被災地の方々が強烈な苦しみ悲しみを体験してきたにも係らず、笑顔で我々を迎えてくれることだ。笑顔の対応を受けた人は、現実の被災地の酷さとそこで暮らしている人の笑顔とのギャップに戸惑う。テレビや新聞で知っている自分の頭の中の被災地と比べて、現実に訪れた被災地を体験すると、異口同音に被災地に来て良かったと言って帰っていく。テレビや新聞などの媒体では表現できない人と人との交流、コミュニケーションが現地に行くと体験できる。それが人を感動させるのだと思う。

現在、被災地の産業はまだ復興しているとはいえない。こうした時期に観光でも良いから被災地に行き、そこで実際に人と接する。そして、買い物をする。それだけでも良いのではないだろうか。私は行くたびに石巻の地酒「墨廻江（すみのえ）」、栗原市の「綿屋」などを買って送っている。むろん笹かまぼこも買って、横浜で仲間と呑むことにしている。

今年、東北観光博が開催されているが、3月から9月までの7か月間で東北地域への延べ旅行者数は約3,100万人（前年比7%増、前前年比10%減）延べ宿泊者数は約2,700万人（前年比7%増、前前年比8%増）と推計され、経済波及効果は約9,800億円となっている。

まずは、東北地方に行って、現状を見て宿泊する。そして友人や近隣に土産をいっぱい買って帰る。それも被災地支援の一つだ。

被災地は、これから寒くて厳しい二度目の正月を迎えることになる。



左：式典に駆け付けた歴代の仮面ライダー。
撮影：2012年11月17日



右：石ノ森萬画館 Re OPEN 当日の1階の賑わい。
撮影：2012年11月17日

仲原正治

の

まちある記

「みんなの家」釜石・宮城野 2013年1月

昨年、アンスティチュ・フランセ東京（旧東京日仏学院）で建築家の伊東豊雄さん、「闇の国々」の著者ブノア・ペータースさん、フランソワ・スクイテンさんと一緒に「都市とユートピア」というシンポジウムに出演した。その時に伊東さんから直接「みんなの家」の話聞いた。「みんなの家」を作っていく過程で、今までの建築の考え方とは違った側面が見えてきて、建築の根本を問われる仕事だと話してくれたことが印象的だった。そこで、実際の「みんなの家」は、どうなのかを訪ねる旅に出た。



橋上駅舎の新幹線「新花巻駅」を潜る形で釜石線「新花巻駅」がある。
撮影：2013年1月20日



釜石線の車内。外は雪景色だ。
撮影：2013年1月20日



右：駅前にある新日鐵住金製鐵所 撮影：2013年1月20日

★被災地・三陸地方は遠い

1月20日朝4時半に起き、横浜発5:25の東海道線で東京へ、始発(6:04発)の「やまびこ51号」で新花巻へ。そこから釜石線に乗換え、「はまゆり1号」で釜石に着いたのが10:58。横浜から5時間半。始発の「やまびこ」を逃すと、13時にならないと釜石に着けない。新花巻駅は、花巻や遠野方面への乗り換えのために作られた駅で、近くには物販店やサービス施設はほとんどない。

釜石線内は立っている乗客はいないが、ローカル線としては思っていたよりも多くの方が乗っていた。新花巻駅から遠野を超えるまでは雪景色が続く。遠野駅で1/3程度が降りていく。天気は良好、車内はポカポカ。遠野を過ぎると雪の量は減り、陸中大橋駅付近は雪もなくなり「近代製鉄発祥の地」の看板が大きく掲げられている。

釜石市の北部には津波で大きな被害を受けた大槌町、南には大船渡市がある。JR山田線(盛岡—宮古—釜石)は宮古—釜石間が不通、三陸鉄道南リアス線(大船渡市の盛(さかり)—釜石)も全線不通で、釜石から先は代行バスになる。(南リアス線は2013年4月3日に盛—吉浜間が開通予定。2014年春には全線開通を目指している)

釜石駅前を降りると正面に「新日鐵住金製鐵所」の建物が存在感を見せている。鉄の街に相応しい玄関風景だ。釜石が鉄の町になったきっかけは、1857年(安政4年)に南部藩士大島高任が大橋地区(鉄鉱石の産地)に洋式高炉を築き、鉄鉱石製錬による出鉄操業に成功したことから始まっている。1880年には官営製鐵所ができ、同時に釜石鉄道(釜石—大橋間の鉱山鉄道、日本で3番目の鉄道)が開通する。官営製鐵所は3年で廃止となるが、その後、民間が再生し、1934年に日本製鐵株式会社釜石製鐵所になり、2007年に近代製鉄発祥150年を迎えている。

仲原正治

の

まちある記

右：釜石市内案内地図 地図の左側に釜石港があり、その付近が津波による被害が大きかった。

撮影：2013年1月20日



釜石駅前の釜石物産センター「シープラザ釜石」にはユニクロも入居している。

撮影：2013年1月20日



シープラザ遊(テント)で行われていた「わんこそば大会」には多くの市民が集まっていた。

撮影：2013年1月20日



甲子川にあった「橋上市場」は2003年に廃止され、駅前橋上市場「サン・フィッシュ釜石」に移転し営業している。

撮影：2013年1月20日



「サン・フィッシュ釜石」には約20店舗が出店している。

撮影：2013年1月20日



釜石駅に着くと、隣接するシープラザ釜石で「わんこそば大会」が開催されていて、鮭のつみれ汁や甘酒が無料でサービスされていた。その土地の香りがするイベントは観光客にとっては最高のおもてなしだ。釜石駅前が津波で20cmほど冠水したと聞いたが、この付近は被害の跡はほとんどない。

★ 「平田（へいた）第六仮設住宅」を訪ねる

釜石駅からタクシーで15分ほどの平田総合公園内の仮設住宅(240戸)は震災から5か月後の2011年8月3日に完成している。

平田第六仮設住宅の大きな特徴はコミュニティケア型仮設住宅になっていることだ。阪神淡路大震災の教訓を活かして、居住者が孤独にならないように、居室や玄関を向かい合わせに配置し、高齢者のためにバリアフリー仕様、医・職・食・住がサポートされた住空間を作っている。「ケアゾーン」が設けられ、そこに単身者や夫婦二人の高齢者が入居している。診療所と「サポートセンター」があり、総合相談、デイサービス、訪問看護、訪問介護、診療、生活支援サービスも行われ、一日2～3回、高齢者の見回りをするとともに24時間体制でのケアコールシステムを採用している。また、保育園も完備し、子育てゾーンも用意されている。

たまたま、復興大臣が施設に視察に来ていたところにぶつかったため、住宅から多くの住民が屋外に出てきていた。今まで仮設住宅をいくつか廻ったが、家に閉じこもっていることが多く、なかなか住民に会うことができない。今回は何人かの人に話を聞くことができた。

仲原正治

の

まちある記

右：仮設住宅のケアゾーン
地区は木製のデッキで結
ばれている。
撮影：2013年1月20日



平田第六仮設住宅案内図。
子育てゾーンとケアゾー
ンの間に「みんなの家」は
ある。
撮影：2013年1月20日



★「みんなの家」は、地域のたまり場

岩手県の応急仮設住宅の建設は、2011年3月下旬に着手し4月から7月にかけて集中的に作られ、8月11日には全施設が完成している。

平田第六仮設住宅は、完成時期が遅い施設で、高齢者のサポート拠点を設けたこともあり、釜石市内だけではなく、山田町、大槌町など、他都市からの入居者もいると聞いた。同じ地域からの入居者がほとんどいないため、入居者同士が親しくなるのには時間がかかったという。市街地から離れていて買い物などは不便だが、様々なサービスがあるので、安心して暮らすことができる。現在は、様々な行事が行われ、日常的な溜まり場ができていますので、そこに行けば、いろいろな人と交流できると住民のひとは語っていた。筆者が福島県いわき市に家があると言うと「これから復興住宅ができて釜石で暮らすことができるし、今もどうにか暮らしができています。福島の人達のことを考えると、自分たちはまだ恵まれている。」という答えが返ってきた。

この場所の「みんなの家」は建築家5人(伊東豊雄、山本理顕、内藤廣、隈研吾、妹島和世)で作る「帰心の会」が寄付を募り、山本理顕さんが設計して2012年5月に完成したものだ。

ケアゾーンの先に、円錐型(タジン鍋)の「みんなの家」がある。昼はカフェ、夜は居酒屋的な「たまり場」として使われている。みんなが気軽に集まれる場所ができたことで、仮設住宅に閉じこもらず、交流ができるようになっている。

仮設住宅には集会所があるが、公費で作ったため機能が優先され、住民が自由に気軽に使う場所にはなっていない。他地区の仮設住宅でも、集会所では町内会の集會



仮設住宅の路地には名前
が付けられている。家族と
その元気の元である「マ
マ」を支援する「ママハ
ウス」では母子の心身ケア、
就労支援などの自立の支
援をはじめ「しゃべり場」
を設けている。
撮影：2013年1月20日



平田サポートセンター・平
田診療所では、毎日、高齢
者を中心としたケアをし
ている。
撮影：2013年1月20日

仲原正治

の

まちある記

には使うが、居酒屋利用や気軽に歓談できる場所にはなっていない。「みんなの家」のように、使い方は地元が好きのように考えれば良いという自由な空間が、非常に重要な場所になっている。

右：山本理顕設計の円錐型（タジン鍋）の「みんなの家」
撮影：2013年1月20日



「みんなの家」には和室があり炬燵が設置されている。
撮影：2013年1月20日



視察に訪れた復興大臣一行。大臣の視察には30人近い役人、関係者とマスクミが付いて廻る。
撮影：2013年1月20日

★釜石市内の状況とNPOが支える「みんなの家」

釜石市の被災状況は、死者行方不明者1,040名、建物の全壊半壊3,655棟で、現在、50か所に3,164戸の応急仮設住宅ができています。特に被害が大きかった釜石港近辺では、市営住宅も被災し、ほとんどが取り壊されていた。釜石第一魚市場は解体され整地されているが、この付近は地盤沈下が激しいため、かさ上げをする予定となっている。

岩手県沿岸6市町の被災状況							
都市名	面積(Km ²)	震災前人口	震災前世帯数	死者行方不明者数	全壊半壊家屋数	仮設住宅箇所数	仮設住宅数
釜石市	441.43	39,578	16,095	1,040	3,655	50	3,164
宮古市	1,259.89	59,442	22,504	514	4,005	62	2,010
大船渡市	323.3	40,738	14,814	420	3,934	39	1,811
陸前高田市	232.29	23,302	7,794	1,773	3,341	53	2,168
大槌町	200.59	15,277	5,674	1,258	3,717	48	2,146
山田町	263.45	18,625	6,605	753	3,167	49	1,990
合計		196,962	73,486	5,758	21,819	301	13,289
2010年10月1日国勢調査から				2013年1月31日現在		2013年2月1日現在	

(岩手県沿岸6市町の被災状況図 作成：仲原正治)

仲原正治

の

まちある記



高台から見た釜石港。海のそばの整地された場所に釜石第一魚市場があった。撮影：2013年1月20日



釜石港付近の建物は2階部分まで津波で利用できなくなっている。

撮影：2013年1月20日

右：LIXILをはじめ、多くの民間企業からの支援でできた「みんなの家」
撮影：2013年1月20日



みんなの家の入口には誰でも利用できる旨の看板が。
撮影：2013年1月20日

魚市場に近い只越町に釜石の「みんなの家」がある。ここは、街の賑わいを取り戻すために商店街の人々の活動拠点として、イベントや集会ができるようになっている。無料のお茶も用意されていて、町の気軽な立ち寄りステーションとして、近くの市役所職員や病院に来る人たちの憩いの場となっている。設計は伊東豊雄+伊東塾の共同設計で2012年6月に完成している。ここを運営するNPO法人@リアスNPOサポートセンターは中心市街地の活性化と商店街を含めた『まちなかの賑わい』創出のため、釜石市只越町商店街振興組合青年会有志により2004年に作られた総勢90名という大きなNPO法人だ。震災前まではコミュニティ・ビジネス支援などを中心に事業を進めてきたが、震災後は、就業支援事業や就労マッチングだけではなく、毎日600軒もの仮設住宅の高齢者への声掛けや広報誌「キックオフ」の制作、全世帯配布を行っている。また、2011年11月にオープンした青葉公園商店街（仮設商店街）の「復興ハウス」ではインターネットセンターを運営している。



被災地を訪ねると、地域の協議会や多くのNPO法人が町の中で活動していることがわかる。「NPO (Non Profit Organization)」とは様々な社会貢献活動を行い、団体構成員に収益を分配することを目的としない団体の総称で、収益事業は認められるが、事業で得た収益は、様々な社会貢献活動に充てることになる。NPO法人とは特定非営利活動促進法(1998年施行)に基づいて特定非営利活動を行うことを主たる目的として設立された法人で、福祉、教育、文化、街づくり、環境、国際協力など様々な分野で、2012年12月現在で約47,000の法人が認証されている。

仲原正治

の

まちある記



仮設の青葉公園商店街、中央の木造の建物がインターネットセンター。撮影：2013年1月20日



NPO 法人@リアス NPO サポートセンターが毎月発行している広報誌「キックオフ」

右：「帰心の会」が最初に手掛けた「みんなの家」は設計が凝っているわけでもなく、ふつうの家だ。撮影：2013年1月23日



「みんなの家」の内部の家具（テーブル、上がり座敷、キッチン、棚など）の製作や、外装の塗装などは、熊本大学、九州大学、神奈川大学の各研究室の学生が行っている。炬燵が置いてあるが、炬燵は優秀なコミュニティツールだ。撮影：2013年1月23日

★「みんなの家」がきっかけで、住民が花を育てる宮城野

「帰心の会」が最初に作った「みんなの家」は、仙石線福田町駅から徒歩 30 分ほど、工業団地内の福田町南一丁目公園に設けられた仮設住宅の一画にある。

伊東豊雄さんは、「震災で家を失い、仮設住宅に住まざるを得ない状況に置かれている方々が、精神的に安らげる場所を造りたい」と考え、「帰心の会」を結成し、「みんなの家」を発想した。熊本県が主体となり「みんなの家」建設推進委員会が組織され、仙台市がこの構想を受け入れた。建設場所は、集会所の南隣。設計は伊東さんのほか、KAP (Kumamoto Artpolis) アドバイサーの桂英昭さん（熊本大学准教授）、末廣香織さん（九州大学准教授）、曾我部昌史さん（神奈川大学教授）の 3 人。

仮設住宅は震災から 3 か月後の 2011 年 6 月に入居を開始し、7 月には住民組織である自治会が誕生している。自治会ができたため話も進めやすくなり、「みんなの家」の構想を受けた仙台市も自治会とスムーズに話が進んだ。「みんなの家」は、設計後に構造体の仮組を熊本で行い、それを解体して持ってきて組み立てている。また、熊本県産材をもらい受け外装材を取り付け、八代のタタミ表も利用している。そのため工期が短縮でき、震災から 7 か月後の 10 月には誕生している。



1 月の水曜日の午前 10 時前に訪れたが、管理をしている住民が暖炉に薪をくべながら、話をしてくれた。

当初、伊東豊雄さんが著名な建築家とは知らずに、説明を聞いても、どこの人が来ているのだろうかというくらいにしか考えなかった。何回か来て、丁寧に説明をし

仲原正治

の

まちある記

てくれ、熊本県など様々な団体や個人が応援していることを聞いて納得したとのこと。今は、何か事あるごとに伊東さんを始めスタッフが来てくれるので、うれしいと話していた。駆け足で作った「みんなの家」だが、その間に住民と充実した話し合いが行われ、完成時にはほとんどの住民が集まって、餅まきをして盛り上がった。「みんなの家」では子供たちのワークショップも行われ、作品が展示されている。この仮設住宅は小学校から遠いため、子供たちを抱える家族は他の仮設住宅に移り、子供たちがあまり住んでいない。しかし、週末には子供たちが祖父母を訪ねてきてくれて賑やかになる。公園で遊ぶ子供たちや「みんなの家」でマンガを読んだり絵を描いたり、子どもたちのたまり場としても活用されている。

「みんなの家」がきっかけとなって、自分たちも何かをしようと、みんなの家の周辺に、手作りで花壇や菜園を作っている。春にはチューリップが咲きとても心豊かになり、大根などを作ってパーティを行うなど、地域の共同作業を後押ししている。横浜から来たと言うと、チューリップの球根は横浜の園芸関係の組合が寄付してくれたと感謝していた。

左：炬燵を取り囲んで、ワークショップの作品や漫画などが並べられ、子どもたちが遊べるようになっている。
撮影：2013年1月23日

右：「みんなの家」の周りには、花壇や畑が自主的に作られている。冬だったため花は咲いていなかった。
撮影：2013年1月23日



★伊東豊雄さんの「みんなの家」の考え方

伊東さんによると、宮城野区の「みんなの家」を作った時とベネチアビエンナーレで金獅子賞を受けた陸前高田の「みんなの家」は少し性格が変わってきていると言う。宮城野（最初の「みんなの家」）は、被災直後で、住民が新しいコミュニティを形成していくためのたまり場として、一緒に食事をしたり、集まって議論できる場所を作ろうと思った。陸前高田では、震災から1年半が経ち、津波で立ち枯れた杉を伐採してもらい、地元と一緒に樹皮を剥ぎ、柱を作っている。みんなで一緒に作ることで、このプロジェクトを通して失われた町の復興が始まっていくという気持ちで取り組んでいる。

伊東さんは「東京という都市に憧れて東京をイメージして建築を考えてきたが、最近、東京の魅力が消えかかっているときに、3.11が起これば、もう一度建築家の原点に立ち返り問い直そうと思った。「みんなの家」を被災地に作った時に、ここには

仲原正治

の

まちある記

本当に小さいけれどユートピアがあると思った。」と語っている。

宮城野区も釜石市の魚市場近くの「みんなの家」も建築的には、これが伊東豊雄の設計か？と感じさせるほどフツウの建物だ。ここには装飾という無駄がほとんどない。お金も限られている中で、地域の人々が集うという最低限の機能を持っている。彼は、建築の原点が「人々が集う場所」ということを再認識したと語っていた。

東松島市の「こどものみんなの家」(設計:伊東豊雄建築設計事務所+大西麻貴、2013年1月竣工)と東松島市宮戸小学校敷地内に完成したSANA A設計(妹島和世+西沢立衛、2012年10月竣工)の「みんなの家」になると、最初の「みんなの家」に比べると、設計者の個性が出てきている気がする。ここでは、設計者も少し心のゆとりができたのか、個性あふれる建築になっていた。

右：地元との協働作業で柱を作った陸前高田の「みんなの家」。

撮影：2015年1月25日



陸前高田のみんなの家は、こたつではなく、ストーブが設置されている。

撮影：2015年1月25日



右：東松島市「グリーンタウンやもと」にある「こどものみんなの家」は三つの小さな建物で構成され、子供達の隠れ家的な感じがする。右側の建物は移動できるように台車が付いている。

撮影：2013年3月7日



仲原正治

の

まちある記

右：SANA Aの設計した「みんなの家」には外部に屋根付のテラス空間がたっぷりあり、寒い時のためにビニールシートで囲えるようにしている。
撮影：2013年3月7日



★自治体、企業、NPO、住民、みんなが支える「みんなの家」

「みんなの家」の予算は1軒750万円となっている。そのため、多くの自治体や企業、NPOが採算を考えずに物的、精神的な支援を進めている。東京(国)を介さなくても、できることを進め、それがうまく機能していると感じた。

そうした中で、仕事で被災地に入っている人たちの中には、予算の執行を急ぐあまり、急激な変化についていけない人たちもたくさんいる。昨年暮にコンサルタント会社の人と懇談していたら、被災地で働いている職員が行方不明になってしまった。自殺が心配だとの電話が来た。また、今年1月には宝塚市から大槌町に派遣された職員が自殺したという記事も目にした。職員派遣の場合、派遣元の都市から派遣先に数名というケースが多く、他の自治体との連携が難しく、孤独になりがちだ。例えば、横浜市はA市に土木、建築、福祉など、あらゆる行政分野の職員を派遣し、総合的にまちづくりの手伝いを行う方法にすれば、被災地で連携をとって支援活動ができるし、職員も孤独にならない。また、横浜市民もその町を具体的に応援できるし、交流も生まれる。こうした派遣方法の方が有効に思えてならない。

日本は、今、不自然な状況だ。被災地では行うことがたくさんあり、予算も相当ついている。しかし、人出不足や専門家不足で、復興が進んでいない。ゼネコンはたくさんのお金をもらっているのに、除染作業などで手を抜いた仕事をしている。復興資金は相当あるのに、支援を進めているNPO団体や個人には、お金が廻ってこない。被災地では、ガレキの撤去、除染、住民対応など、毎日の生活がギリギリの状況の中で働いている人や無償のボランティアがたくさんいる。一方で、都会では就職できないと嘆いている大学生も多い。選ばなければ仕事はいくらでもある。

仲原正治

の

まちある記



被災地では「社員募集」の
掲示やチラシがいろいろ
なところにある。撮影：
2013年3月7日

右：石巻市桃浦にある洞仙寺の周辺の集落70戸はすべて津波で流され、洞仙寺には建築家による東日本大震災復興支援ネットワーク「アーキエイド」により地域再生最小限住宅「コアハウス／板倉の家」(モデルハウス)(写真左奥)が作られた。設計は「東京工業大学塚本由晴准教授」
撮影：2013年1月22日

横浜に帰ってくると、被災地で働いている人たちの気持ちと都会で暮らす人々との温度差を大きく感じてしまう。

震災から2年が経過した。津波で大きな被害を受けた地域のまちづくりは始まったばかりで、仮設住宅の当初の入居期間の2年間に迫っている。1年の延長は認められるが、いつになったら仮設から出られるのかの展望はまだ見えていない。原発被害の地域では30年間帰れないという現実もある。

この2年間、私たちは自分の場所でどういう暮らしをしてきたのか。被災地のために何をして何ができたのか。ほんとうに原発が必要なのだろうか。どういう暮らしをしたら安全で安心して豊かな生活ができるのか、もう一度問い直してみたい。



★「みんなの家」で「公平、平等」を考える

2015年1月に訪ねた陸前高田から気仙沼方面に向かう一般道路の少し高台にある「みんなの家」では、菅原さんが対応してくれた。彼女が住んでいた大町商店街は、間口が狭く奥行きが長いという様式の商店が多かったが、商店街は流されてしまい、現在は仮設住宅に住み、「みんなの家」を運営している。「みんなの家」は建築家の乾久美子、藤本壮介、平田晃久の三氏が設計し、ベネチアビエンナーレの建築展で最優秀賞の金獅子賞を受賞している。菅原さんの活動はマスコミでもたびたび紹介されているが、特にベネチアビエンナーレの受賞後、国内外からひっきりなしに人が訪れ、その対応に明け暮れたようだ。

建物は木造2階建て延床面積約30㎡で高さ約10m、津波で立ち枯れた杉を活用して柱にしている。地盤のかさ上げについて話を聞いてみると地元でも賛否両論があ

仲原正治

の

まちある記

るようだ。現在の復興計画では、新しいコンパクトな街を目指すとしているが、コンパクトにすること自体は、この町で住み活動する人たちにとっては良いものだ。しかし、住民にとっては、先祖代々の土地を区画整理事業で居住地をシャッフルされ、昔の面影もないかさ上げした土地になるため、今までの町に対する思い入れがなくなると感じている人もいる。また、区画整理事業の減歩率が30%以上で土地も相当減らされる。権利者一律の基準で決めるため、大きな土地の所有者と小さな土地しか持っていない人との格差が生じる。新しい町を作るだけではなく、懐かしい町と共存できるような計画にしてほしいという声も聞こえる。

また、市のアンケートでは「かさ上げした場所に戻ってくるか」と「高台に移転するか」という二つの選択肢になっていて、かさ上げせずに元の場所に帰りたいという選択肢はなかったと聞いた。菅原さんは、「平等・公平」と行政側は言うが、ひとり一人の被災状況や元の財産状況が違うものを、一律の尺度で測ることを「平等」というのはおかしいと語っていた。例えば、民法では介護を一所懸命した子と何もしない子の遺産相続は同じと規定され不公平だが、それと同様で、状況や背景が違う被災者に対しては、もう少しその人や家の実情に合わせたものにしてほしいと訴えていた。復興住宅の入居についても「入りますか」「入りませんか」とう選択肢で、余裕のない人の中には無料の仮設住宅を出たくないという人もいると聞いた。結局、家が残った人、流された人との格差、被害者同士の格差も生じているのが現状だ。

建築家の伊東豊雄さんたちの支援で建設した「みんなの家」も3-4mかさ上げするため移転を迫られている。建物を解体して別の場所に移転し、少し大きいものにしたいが、柱の杉は長さが10mもあるので、これをそのまま移転するのか、切断して再利用するのも課題だと話していた。

左：陸前高田の「みんなの家」柱は約10mの杉が構造材に使われている。
撮影：2015年1月25日

右：「みんなの家」の屋上テラスから見た陸前高田市内
撮影：2015年1月25日



左：復興ニュースでは、
防災集団移転促進事業の
進捗状況を知らせてい
る。
(復興 NEWS 陸前高田)

右：住宅は1DK～3DK
K、収入によって家賃が
変わる
(復興 NEWS 陸前高田)

各戸配付

復興News 陸前高田 <第19号>

平成26年12月発行
陸前高田市復興対策局

ニュース1 防災集団移転促進事業 現在の進捗状況をお知らせします
 <完成は16団地と過半数に>

平成26年11月末現在における防災集団移転促進事業の進捗状況をお知らせします。完成は16団地で、順次住宅再建が進んでいます。

【凡例】
 ■ 完成済
 ■ 工事中

	団地数	世帯数
完成済	16	128
工事中	14	275
計	30	403

詳しくは、復興対策局事業推進室(内線434)まで。

募集期間
 平成27年1月13日(火)から1月30日(金)まで(満期有効)(※土日祝日除く)
 ※臨時受付窓口 平成27年1月25日(日)午前9時から午後3時まで(市役所1号棟1階 総合案内付)

注意事項
 ① 申込書に記載された内容が事実と異なる場合、または入居資格を失った場合は申し込みを無効としますので、あらかじめご承知ください。
 ② 入居決定後、連帯保証人との連名による誓約書の提出が必要です(連帯保証人の所得証明書及び印鑑登録証明書添付)。

申込書受付窓口・問い合わせ先
 〒029-2222 陸前高田市高田町字鳴石42番地5
 陸前高田市建設住宅推進課(6:30～17:15)※土日祝日を除く
 電話0192-54-2111(内線401)

想定家賃
 想定される標準的家賃であり、家賃は世帯収入および団地ごとに変動します。

月給所得(円)	想定家賃(円)			
	1DK (4.7㎡)	2DK (5.6㎡)	2DK間いす (7.2㎡)	3DK (9.0㎡)
I-1	0	5,300 (1,700)	6,600 (2,100)	7,600 (2,400)
I-2	1~17,250	9,000 (5,100)	11,200 (6,500)	12,900 (7,400)
I-3	17,251~24,500	9,000 (8,600)	11,200 (10,700)	12,900 (13,300)
I-4	24,501~40,000	9,000	11,200	12,900
I-5	40,001~51,750	12,700 (12,100)	15,900 (15,100)	18,100 (17,300)
I-6	51,751~60,000	12,700	15,900	18,100
I-7	60,001~69,000	16,400 (15,500)	20,500 (19,500)	23,400 (22,300)
I-8	69,001~80,000	16,400	20,500	23,400
I-9	80,001~104,000	17,200	21,700	24,800
II	104,001~123,000	20,000	25,000	28,600
III	123,001~138,000	22,900	28,600	32,700
IV	138,001~158,000	25,800	32,300	36,900
V	158,001~186,000	29,500	36,900	42,100
VI	186,001~214,000	34,000	42,500	48,600
VII	214,001~259,000	39,800	49,800	56,900
VIII	259,001~	45,900	57,400	65,700

※2 上記家賃の他に、共同費(世帯あたり、月額約1,200円)及び駐車場使用料(1台あたり、月額約1,500円)が別途必要です。

※3 入居後3年を経過し、世帯の月給所得が158,000円(高齢・障がい世帯の世帯については214,000円)を超える世帯は、4年目から別途議定が生ずるとともに、住宅の借渡し、努力義務が生じます。

※4 入居後5年を経過し、3年連続で、世帯の月給所得が313,000円を超える世帯は、6年目から新たな標準的家賃が生ずるとともに、住宅の借渡し義務が生じます。

標準的な間取り図(※異なる場合があります)

仲原正治

の

まちある記

右: 女川町の案内図。様々な地区に漁港が点在している。町の南側地区に「女川原子力発電所」がある。
撮影 2015年1月26日



2015年3月21日に石巻線が全線開通するため、新しい女川駅が建設中だ。建物は以前の駅から150mほど内陸寄り、盛土して海拔約7mの場所で3階建てだ。1階が駅舎、2階が町営温泉施設「女川温泉ゆぼっぼ」、3階に展望台が設けられる。設計者は2014年にプリッカー賞を受賞した坂茂氏。建物は女川町が建設し、駅舎部分をJR東日本に有償貸付する。延べ約1,057㎡、約7億2000万円の工事費となっている。駅舎から女川港に向かってなだらかな斜面にプロムナードを整備し、周辺に商業施設を配置する予定だが、周辺は宅地造成中で、まだ、ほかの建物は無い。女川原子力発電所の敷地の高さは14.8mで、東北電力によると13mの高さまで津波が来ていたと発表している。女川原発が福島第1原発のような状況になったらと想像すると、身の毛がよだつ。女川原発は1980年に着工し、84年から稼働を開始しているが、今回の震災で現在は停止している。

左: 現在は「江島共済会館」も取り壊され、地盤のかさ上げを進める市街地。
撮影 2015年1月26日

右上: 震災から4か月後の女川は地盤もまだ水につき、「江島共済会館」なども倒れた状態のままだった。
撮影 2011年7月4日



仲原正治

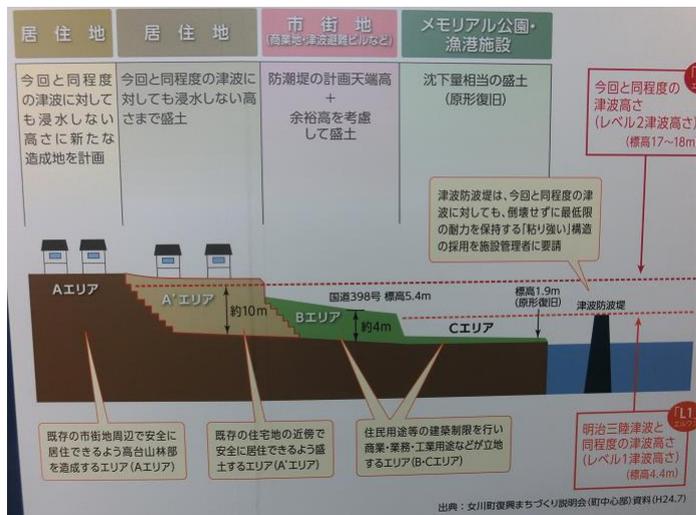
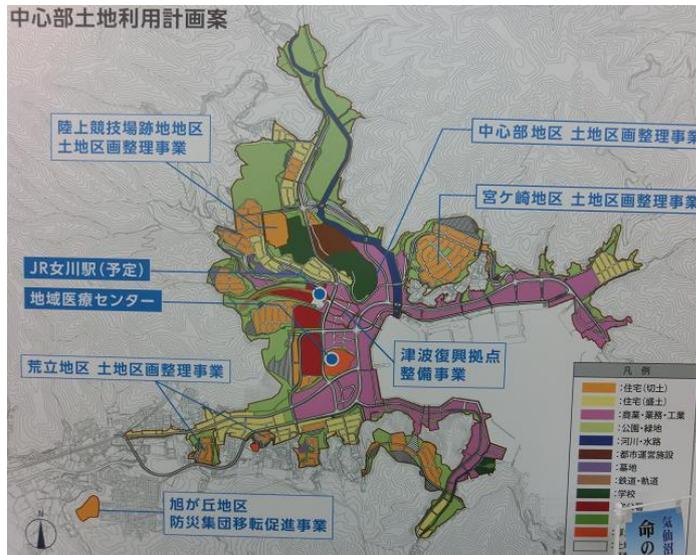
の

まちある記

(

右上：女川町中心部土地利用計画案。
撮影 2015 年 1 月 26 日

右下：計画案断面図。
撮影 2015 年 1 月 26 日：



左：女川駅周辺の災害復興計画の模型。
撮影 2015 年 1 月 26 日

右：新しい女川駅は 2015 年 3 月 21 日開業に向けて工事が進められている。
撮影 2015 年 1 月 26 日



仲原正治

の

まちある記

右：新女川駅前周辺は造成工事が進んでいるが、駅舎以外の建物工事は進んでいない。

撮影：2015年1月26日
左：震災後1か月頃の南



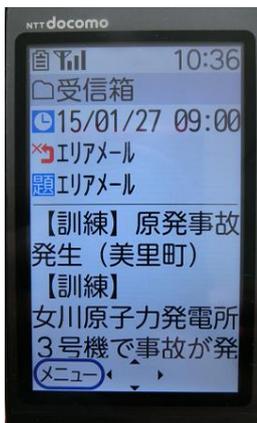
石巻市滞在中に、宮城県内の美里町、石巻市、涌谷町の3か所から下記のようなエリアメール（訓練メール）を携帯電話が受信した。こうした訓練メールを何回か配信していかなければならない実情は、福島原発崩壊事故以降、原発周辺地域では、住民は精神的に大変な状況を抱えていることを実感させる。

（訓練）屋内退避の準備 涌谷町

【これは宮城県原子力総合防災訓練に伴う訓練用メールです。】【訓練参加者以外の方は実際の行動の必要はありません】今朝発生した地震により、女川原発3号機で事故が発生し、現在原子炉の除熱機能が喪失しています。このまま事故が進展すると屋内退避が必要となる場合がありますので、屋内退避の準備を開始してください。【訓練 涌谷町】（宮城県涌谷町）

★南三陸町で「震災遺構を残す」意義を考える

宮城県南三陸町は1875年に志津川村、清水浜などが合併して元吉村となった。その後、1889年、町村制施行で志津川町になる。1955年には入谷村・戸倉村を吸収合併。1977年気仙沼線が全線開通し、2005年の平成の大合併時に歌津町と合併し南三陸町と名称を変更した。宮城県の北東部にあり、リアス式海岸につらなる志津川湾に囲まれ、山が海岸線近くまで迫った地形だ。八幡川の河口付近に官公庁や病院などが集まり中心市街地を形成していたが、津波で流され、町は壊滅した。3階建ての南三陸町防災対策庁舎では、職員が最後まで防災放送を続け、多くの職員がなくなり、志津川病院では、屋上に残り残された入院患者がヘリコプターで救助される場面をテレビで放映していた姿がまだ記憶に残っている。



筆者の携帯が受信した美里町の訓練メール
撮影2015年1月28日

仲原正治

の

まちある記

左：震災後1か月頃の南三陸町中心市街地。建物は南三陸町防災対策庁舎。
撮影：2011年5月2日

右：現在の南三陸町防災対策庁舎
撮影2015年1月26日



南三陸町でも、地盤のかさ上げの工事が進み、旧防災対策庁舎は造成工事中の中にポツンと残されている。防災庁舎から港に続く道路は工事のために閉鎖され、う回路ができています。町では「逃げやすいまちづくり」を目指し、10m程度の盛土で「発生頻度の高い」津波に対応できるようにしている。「最大クラスの津波」については避難を基本としつつ、避難が困難な夜間の津波や要援護者へ対応するため、公共施設や住まいなどの高台配置や避難施設の整備など多重防御の推進によって被害を最小限に抑える施策を進めている。

防災対策庁舎を震災遺構として残すかどうかについては、町の方針はぐらついてきた。佐藤仁町長が当初、保存の意向を示していたが、津波の跡が生々しく遺族らが強い反対の意志を表明したため、2011年秋に撤回している。その後、「早期解体」や「保存」、「解体の一時延期」の陳情が出され、町議会は早期解体を求める陳情を採択していた。

右：南三陸町の市街地の地盤のかさ上げ工事が進み、左に防災対策庁舎が見える。
撮影2015年1月26日



仲原正治

の

まちある記

こうした状況下で、宮城県は2013年12月に「宮城県震災遺構有識者会議」を開催し、県内の震災遺構の評価を進めた。有識者会議は保存する意義として①鎮魂につながるもの②災害文化の伝承③地域を超えたメッセージ性と次世代への継承の三項目をあげている。15年1月に出された報告書で南三陸町の防災対策庁舎は、「震災遺構として、ぜひとも保存すべき価値がある」と評価している。報告書の意見では「世界的に最も認知度が高く、3.11東日本大震災について問いかける力が非常に強い。原爆ドームにも劣らないインパクトを持ち、強い発信力がある。」とし、また「遺族の心情にも配慮が必要であり、拙速に判断するのではなく時間をかけて考えることも検討すべきである。また町だけに対応を委ねるのは負担が大きいため、県などの第三者が関与することも検討すべきである」としている。この答申を受け、宮城県は2031年3月まで町に代わって管理し、保存することを発表した。

1945年8月6日に被爆した広島県物産陳列館（原爆ドーム）も、当初は原爆投下時の惨事を思い出すので撤去を求める声が強かった。しかし49年に広島平和記念都市建設法が成立し、丹下健三による広島平和記念公園の構想が実現するにつれ、原爆被害のシンボルを残し、世界に惨状を伝えていくという市民からの保存運動が活発になり、1966年広島市議会が永久保存することを決めている。保存までに20年余の時間を要しているが、宮城県もその前例を踏襲したものだ。

有識者会議では南三陸町防災対策庁舎のほか、門脇小学校（石巻市）、JR野蒜駅（のびるえき）プラットフォームなど9か所を震災遺構の対象となる施設として答申している。

今回、いくつかの町を廻ったが、印象深かったのは陸前高田市の「奇跡の一本松」と「石巻市立旧大川小学校」だ。一本松は、モニュメントとして蘇ったが、北上川を遡上した津波が84名の児童、職員の犠牲者をだした大川小学校は、被災時の姿のまま残り、校庭には犠牲になった方々の慰霊碑や献花台が設置されている。

左：工事用シートに覆われた旧門脇小学校。前面道路もかさ上げしている。
撮影：2015年1月26日

右：旧野蒜駅プラットフォーム。仙石線陸前大塚―陸前小野区間は内陸に移設するため、野蒜駅も内陸部に新設される。
撮影：2013年3月7日



仲原正治

の

まちある記

三陸地方では明治以降、明治三陸大津波（明治 29 年—1896 年）、昭和三陸大津波（1933 年）、チリ地震大津波（1960 年）と 3 回の大津波で多くの方が犠牲になったが、その後、鎮魂の碑は作ったが震災遺構として残っている施設は、調べたかぎりでは見つからなかった。

震災遺構が存在することで、被災者としては親族が亡くなった惨事を思い出し、辛らすぎて忘れたと思う人も多い。震災後も安定しない生活の再建などで苦労を重ねる生活している人を思うと心が痛む。しかし、二度とこの惨事を繰り返さないためにも、震災遺構を残し、次の世代の防災教育に役立て、防災訓練を繰り返していくことがとても重要なことだと思う。そういう意味では宮城県が 20 年間の猶予を持って、保存について議論していくことを決めたことは評価したい。隣接する岩手県では、震災遺構を今後どうするか議論が行われていない。そのため、中小の市や町が独自で撤去や保存を決めなければならない。こうした、社会的な課題を市町村に任せるのではなく、協働を進めていく姿勢が県や国にも求められている。

東日本大震災の最大の震災遺構は「福島第一原子力発電所」だと思っている。30 年以上の時間がかかる廃棄物処理問題など、原子力発電のあり方を含め、福島の惨状、悲劇を後世に伝えていくためにも、将来に向けて残す方向で検討していくことが必要だ。

左：旧石巻市立大川小学校。
撮影 2015 年 1 月 26 日

右：陸前高田市の「奇跡の一本松」は全国的な保存運動により、モニュメントとして残された。旧ユースホステルの建物も当時の状況のまま。撮影 2015 年 1 月 25 日



★2016 年 1 月 女川駅前商店街を歩く

2016 年 1 月 25 日、釜石発 8:30 の列車で新花巻から仙台経由で女川まで行く予定なので、宿泊した大槌町の「さんづろ屋」では朝食を 6:30 にお願いした。一緒に宿泊した大槌町の派遣職員の中尾さんによると、近頃、朝は大槌から釜石へ行く道路が渋滞して、普段は 30 分かからないのに 1 時間はかかってしまうという。朝食後、すぐに自動車釜石へ向かう。中尾さんの言う通り、いくつかの信号では渋滞があり、結局、1 時間近くかかり釜石駅に到着。そこから釜石線、新幹線に乗継ぎ仙台へと向かう。仙台からは仙石東北ライナーに乗車して石巻まで行き、石巻線に乗り

仲原正治

の

まちある記

換え女川に到着した。列車の乗り継ぎがあまりよくないので、仙台で少し休憩し、女川に着いたのは午後3時少し前。

今回の女川訪問は、女川駅前の商店街が2015年夏にオープンしていると聞いたからだ。仙石線は海岸部分の駅を山側に移転させて全線開通している。石巻から女川へ向かう石巻線は、海岸線を走る場所も多く、まだ、護岸工事が完全にはなされていない。仙台から石巻経由で女川までは、以前はバスに乗継いで行かざるを得なかったものが、当たり前のように電車で行くことができるようになった現実は喜ばしいことだ。

左：石巻線は海岸線が近く、まだ護岸工事を進めている最中だ。

撮影：2016年1月25日

右：供用開始している女川駅（設計：坂茂）

撮影：2016年1月25日



坂茂設計の女川駅の前には広場ができ、海に向かってなだらかな傾斜に新しい建物が10棟程度できていて、新しい商店街として営業を始めている。電気店や婦人服店、飲食店などができているが、月曜日の午後だったこともあり、人影が少ない。商店街の中心部には延床面積約1,300㎡の「女川町まちなか交流館」もできていて、内部には、会議室や多目的ホール、多目的室、調理室、キッズコーナーなどが設けられていた。ここも午後3時ころには誰も利用している人がおらず、視察に来ている人が係員から説明を聞いていた。

女川は駅前に商店街という軸をつくり、そこを中心として住宅を高台に移設させる計画になっているが、歩いてみると、商店街には生活感というか生活臭さがほとんど感じられない。町の中に中心となる軸をつくることは、わかりやすいこともあり賛成だが、生活臭い「路地」など猥雑感を作ることは難しい。20年くらい経たないと「まち」は成熟しないのかもしれない。しかし、20年後にどうなっているのか、少子高齢化の波で、人が減少して、生活臭さができる前に、消滅していつてしまうのかもしれない。それが今の日本の地方の現状だろう。

仲原正治

の

まちある記

右：女川駅から海側には広場と商店街が形成されつつある。
撮影：2016年1月25日



「女川町まちなか交流館」
設計：(株)久慈設計
撮影：2016年1月25日



「女川町まちなか交流館」
の内部は天井が高い。
撮影：2016年1月25日



商店街の一角にイタリアの高級車ランボルギーニをそっくりりに段ボールで作った、通称「ダンボルギーニ」が展示されていると聞いていたので、そこを訪ねた。「今野梱包」という石巻にある段ボール会社が作ったもので、2015年12月23日には本物のランボルギーニとの共演も果たした。こうした取り組みを通じて、地域を全国に知ってもらおう試みは、楽しくもあり素晴らしい。

左：月曜日だったためか、あまり人がいなかった女川駅前の商店街
撮影：2016年1月25日

右：本物とそっくりりに段ボールで作られた「ダンボルギーニ」
撮影：2016年1月25日



商店街の海側には、基礎まで壊れて倒れたままの「女川交番」の姿を見ることができる。保存の可否は検討中と看板に書いてあるが、宮城県は震災遺構として残す方向で検討している。

女川駅に戻り、少し疲れたので、「駅ナカ」にある温泉「ゆぽっぽ」に入った。商

仲原正治

の

まちある記

店で買い物をしたので、銭湯料金は通常の半額の 250 円。温泉には 2-3 人の地元の人が入っている。地元の人と風呂の中で歓談した。彼は高台に家があったので自分は助かった。昔は船に乗っていたが、今は歳をとったので年金暮らしとのこと。町がなくなり、行くところがないので、寂しいと語っていた。温泉は人々を集め、癒してくれるので、コミュニティスペースとして最適だと思う。ここに安くて美味しい食堂が併設されていればなお良い。温泉で身も心も温まり、仙台経由で横浜へ戻った。

左：基礎部分まで根こそぎ倒壊した女川交番。
撮影：2016年1月25日

右：女川交番の現状を書いた看板。
撮影：2016年1月25日



★宮城で感じる まちづくり、コミュニティ形成の難しさ

女川町は、漁業と原子力発電所で支えられてきた。漁業は、石巻や気仙沼に匹敵する漁獲高を誇り、県内有数の漁業基地として栄えてきた。また、1980年に運転を開始した女川原子力発電所の様々な交付金により町の財政は潤ってきた。そのため、石巻市との合併を行わずに、周囲を石巻市に囲まれる状況となっていた。町を支えてきた原発と漁業という二つが同時になくなってしまう事態が、今回の東日本大震災だった。幸いに、原発は津波が目の前まで迫ったが、被災することなかったが、今後の再稼働については、福島第一原発の例もあり、東北地方では相当ハードルが高くなることが予想され、原発関係の交付金も先細りになっていくだろう。漁業基地は再生途上だが、近い将来には宮城県三大漁港のひとつとして復活するにちがいない。そうした財政上の課題も抱える中で、ほとんど消滅してしまった中心市街地の再生をどうしていくのか、困難な道のりが待っている。職住分離により、住宅地と働く場所が離れていくことによって、地域のコミュニティの再生がなかなかいかどらない可能性を秘めている。

ハードは国の支援などによって整備され、新しい施設がこれからも造られると思うが、人と人の結びつきをこれからどうしたら良いのかは、大きな課題だ。

高齢化社会で、多くの高齢者を抱えている地方都市では、介護などの福祉や健康の問題も大きい。高齢者が仮設住宅から災害復興住宅に移転し、地域の人たちの顔ぶれが変わって、近隣の付き合いは一からのスタートになる。

仲原正治

の

まちある記

新しいコミュニティの形成は時間がかかり、困難を極める。福祉や健康については、自治体が少しは役に立つが、コミュニティの形成については、自治体はほとんど役に立たない。自分たちで、作り上げていかねばならない。そのために、何をしたらよいかの解答は、地域によっても異なるだろう。ただ、人生の楽しみや生きがいを作っていくことを、文化、芸術や祭りなどを通して、少しずつ作っていくしかないのかもしれない。

まだまだ、困難な道が目の前に立ちふさがっているが、一日一日を充実した生活を送ることができる地域社会になることを願っている。

仲原正治
の
まちある記

「仲原正治のまちある記—東日本大震災（地震・津波被害 宮城編）」

著者：仲原正治

発行：2016年3月

「仲原正治のまちある記」は日経BP社「ケンプラッツ」の記事を加筆・訂正したものです。この文章及び写真（提供写真等を除く）については、出典さえ明らかにしていただければ「著作権フリー」です。



仲原正治（なかはら まさはる）略歴

（株）MZarts クリエイティブ・ディレクター（陶磁器・現代アートギャラリー）

1949年東京生まれ。1974年東北大学法学部卒業。

文化芸術によるまちづくり及びクリエイティブシティ政策の専門家。

2011年4月から2015年12月まで、日経BP社の総合サイト「ケンプラッツ」に「まちある記」を連載。全国の中心市街地、東日本大震災の被災地のレポートなど、特徴あるまちづくりを紹介している。

主な著書：「横浜市創造都市事業本部 2586日の戦い」（インターネット出版）。

現在、NPO法人黄金町エリアマネジメントセンター理事、赤煉瓦ネットワーク通信員。